

東方三界黃龍伝

「冥府編」

小龍

## 目次

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
公務員の正体	公務員の義務は、給料分働く事です	南海龍王の憂鬱	黄龍は電気ウナギの夢を見るか？	リセット	扶桑の木	神獣、黄龍	ムツ君	帝都模様	ラクガキは人に見せるものではありません	こちら、地下実験室	赤帝君との喧嘩	その曲の名は
141	131	120	110	102	93	81	72	58	47	40	20	5

- 14 冥府よいとこ、一度はおいで  
15 龍王会議  
16 血みどろのヒロイン  
17 沙龍の夜伽話  
18 エピローグ (終)  
あとがき

206 196 189 179 171 156

# 1 その曲の名は

どこからか、二胡の音が聞こえてきた。

思わず、顔を上げて、開け放った窓から見える夜空に三日月を探す。

が、今夜は満月だった。

(……………?)

白々とした明るい光が、先程から手元にも降っていたのに、何故、今、自分が銀色の細い三日月をイメージしたのか、分からなかった。

そのまま手を休め、頬杖ついて、その理由を探しながら、この二胡の奏でる曲を聴いていた。

人の五感というのは結構不思議なもので、特に聴覚や臭覚といったものは、思い出と抱き合わせになって記憶される。

例えば、私はモルタルの匂いを嗅ぐと、上海の空港で泣きながら初恋の人にプロポーズした事を思い出してしまうのだが、それは、その時、空港の一角が工事

中で、夏の高温多湿も相俟って、辺りにモルタルの匂いが充満していたからだ。

十歳にしてそんな果敢な行動に出た私は、相当早熟だったわけだが、結果は勿論撃沈。その相手というのは、フェロモン・ボンバーな玄人女性とばかり付き合ってるような博打打ちで、私の事などせいぜい『近所のガキ』くらいにしか思っていなかっただろう。

今、何となく、それを思い出した。

(ああ、そうか……)

つまり、この曲は、いつか、どこかで聞いた曲なのだ、と思い当たったら、三日月の謎が解けた。

さつき、私が思い出したのは、晶都で見た細い月だ。

この物悲しくも、美しい旋律と抱き合わせになって、私の脳細胞に記憶されている風景である。

揺れる心のままに、一人、ほっそりとした月を見上げていた時に響いていたこの曲を、今、誰かが弾いている。

散乱していた書類を適当に片付け、その旋律に誘われるままに、窓から外へ出

て、桃林を奥へと進んだ。

蟠桃会の終わった西華の夜は怖いほどひっそりとしている。

招待客達はほとんど帰ったようだから、この二胡を弾いているのはきっと女性だろう、と思った。

西華も、金鑾斗闕と同じで、普段は男子禁制の地だからだ。

どこかの美しい公主様が、眠れぬ夜に手慰みに二胡を弾いている——、そんな風景を期待した。

しかし、私が進んだ先に美しい女人は居なかった。

「名月来たりて相照す（注1）——。月から舞い降りていらっしやったんですか？」

二胡を弾く手を休めて、にこやかな顔を向けるその人は、幾度となく見かけたスーツ姿ではなく、伝統的とも言える直衣を着ていた。

つい先日、武闘大会で顔を合わせた時とは全く違う雰囲気、雅な天界人だ。

極甘な恋のフィルターがかかっているはずの恋人ですら冷静に『最小龍』と揶揄する私を、月の女神に喩えようとは、さすがと言うか何と言うか。

「所によれば、月に住むのは死神だと言われているようですが」（注2）  
半分苦笑気味に言った。こういう女性賛美のセリフは、自他共に認める美女で  
ない限り、社交辞令としてさっさと掃き流すに限る。

しかし、西海龍王はさすがに手馴れていた。

「ならば、貴女の褥に私の魂をお連れ下さいますか」

（うはー。こういうセリフがサラつと言えちゃうわけね……）

さすがは天界一の色男。この手練手管で星の数程の浮名を流しているわけだ。

「西海龍王殿——、貴方だったんですか」

今の演奏が、と言うよりも、あの日聞いた音色の奏者が、という意味で言っ  
た。

火雲宮に殴りこみに行く前、私達が滞在していたのが晶都という街だ。

そして、その責任者というか、町長さんのような地位に居るのがこのダン  
ディ中年なのだから、きつとそうなんだろう。

あの学者の集う街に、他に、こんな雅な趣味を持っている人が居るとは思えな  
い。

「嗜む程度で、お恥ずかしいですが」

「ご謙遜を。……よろしければ、暫く聞かせて欲しいんですが」

「ええ。勿論です、どうぞ」

と、西海龍王は自分の直衣を脱いで、すぐ隣に広げた。

そこに座ってくれ、という意味だ。やる事が徹底してる。

少し躊躇したものの、断る方が失礼だし野暮だと判断して、そこに腰を降ろした。

「先程中断させてしまった曲をお願いできますか？」

「喜んで」

西海龍王が、二胡を弾き始める。心地よい音色が、再び、桃林に静かに響き渡った。

晶都で、名も知らないこの曲を聴いていた時は、心も身体もボロボロだった。

あの頃の想いがふと蘇る。

生きるための選択をして天界までやって来たはずなのに、最期に自分が望んだのは、この身体で命を終える事だった。

それしか方法がないと言われても、前世の身体を借りてまで生き延びるつもりはなかった。

今までの人生、誉められるような事をしてきたわけではない。自分の邪魔をする者は、時として力でねじ伏せ、命を奪おうとする者は、容赦なく狩ってきた。そうやって勝ち取った生を、好きなように生きてきたのだ。だから、最期まで好きにするさ——、と。

ただ、許されるのならば、たった一人、最期に逢いたい人が居る。

その人から逃げてきたはずなのに、私は、この命を終える時は、その人に一目だけでも逢いたい、と思っていた。

「この曲をご存じですか？」

どれくらいの間、聴き痴れていたのだろう。気付くと二胡の音は止んでおり、西海龍王が訊ねた。

「いえ……」

「戦場で子供を亡くした母親の哀切を歌った曲と言われてます」

「哀しげなのはそのせいですね」

「愛別離苦を癒せるものなどない。こんな曲があつたところで、悲しみを助長するだけかもしれないけどね」

そういうえば、西海龍王は何故西華に残っているんだろう。蟠桃会はとつくに終わっているのに。

やっと、そういう事を考える注意力が戻ってきた。

龍王様だから特別扱いなのかもしれないが、深夜の桃林で一人、二胡を奏でるために逗留しているとも思えなかつた。

しかし、プライベートだとしたら私が立ち入る問題ではないし、政治的な話だとしたらあまり関わりたくなかつたので、特に深く考えず、さつくりと立ち上がった。

「長居しました。そろそろ戻ります」

「まあまあ、そう慌てずに。お互い、急ぐ身でもないでしょう。少し、お話ししていかない？ 緑麗ちゃん」

途端に、『雅な貴人』から『愛の狩人』に戻つたと言わんばかりの切り替わりだ。

「まあ、時間はある事がありますが……」

「貴女には色々報告しておかなきゃいけない事とかあるし」

「報告？」

「とはいえ、記憶を失った貴女に言うべきかどうか、ちよつと迷ってるんだけどね」

「……？」

「まあ、一つは大した事でもないから構わないか。貴女は、天界を去る時、元部下達が路頭に迷わないようにって、僕の所に押し付けて行ったんですが……」

「ああ、もしかして、あの三人組の事ですか？」

「あ、もう会った？ 彼ら、緑麗チャンに会うの、すっごい楽しみにしてたみたいだけど」

「武闘大会の前に会いました」

「そっか。じゃあ、彼らにとっては感動の再会になったわけだ」

「杜順少尉には、先に火雲宮で一度会いましたけどね」

探るような素振りには極力見せないように、軽く言ってみた。

あの時——、火雲宮での『本人試しテスト』の場に杜順少尉が居たのは、西海龍王の差し金だったんじゃないかと私は思っている。

結果的に、杜順少尉が居たおかげで私は助かったのだから、単純に考えれば、あれは西海龍王の善意かもしれない。

しかし、緑麗とこの龍王がどういう関係だったのか分からない以上、私は彼を警戒しておかなければならないのだ。

「まあ、彼は火雲宮の警備も兼任してるからね。あそこで鉢合わせたとしても不思議はないか」

「そうですか」

「いや、それでね？ 彼らの本音としては、戻って来た元のご主人に仕えたいだろうけど、僕ン所も、今ちよつと人手不足でねー。解放してあげられるのは暫く先になるかもしれないんだけど、いいかな？」

「それは、勿論。……というより、私では彼らに職を与えることはできませんから、こちらからお願いします」

軍事職に就いているあの三人組に、水雲宮の掃除係をやらせるわけにもいかな

い。

できれば、ずっと西海龍王に預かっけていて貰えればいいんだろけど、そもそも  
いかないのかな。

「今や貴女は自由人になってしまわれましたからね。緑麗ちゃんが『一市民』を  
選ぶとは思わなかったけど」

「え……？ どういう意味です？」

「深い意味はないよ。ただ、闘う場所を取ったら自分には何も残らない、と言っ  
ていた貴女が——という意味かな」

「分からなくはないんですが……」

私にも、そういう本能みたいなものはある。

でも、進んで『将神』になった緑麗と、『将神』を断り続けている私は、違っ  
たはずだ。多分。

「もう一つ、お話があったけど、今宵はここまでにしましょう。お迎えですよ」  
「お迎え……？」

そう言われるまで気付かなかったが、振り向くと、桃木の陰から私達を——と

言うより西海龍王を——ギンギンに睨んでいる飛龍が居る。

西海龍王は苦笑しつつ、飛龍に向けて言った。

「心配しないでも、緑麗ちゃんには何もしないから」

「信用できるか。このクサレ外道が」

「もー、実の親に向かって何て言葉を。九玄ちゃんところに修行に出したのは間違  
いだったかも。変な言葉ばかり覚えてくるんだから」

「行くぞ、緑麗」

飛龍はガシッと私の腕を掴んで、強引に引っ張っていく。

「ちよ、ちよっと、飛龍……」

無表情がトレードマークとまで言われている飛龍の喜怒哀楽を判別するのは、  
かなり難しい。

しかし、微妙な眉の配置で、不機嫌だということは分かる。

飛龍に引きずられたまま、『またね〜』などと言いながらヒラヒラとにこやかに手を振る西海龍王に会釈だけした。

「緑麗、あんまりあの親父を信用するな」

飛龍がそんな事をボソつと言う。

「どういう意味？」

「そのままの意味だ。アイツは何を考えているか分からない。笑って、背中から人を刺すタイプだぞ」

「うーん……」

これが単なる親子間の（一方的な）スレ違いなのか、冷静な評価なのか、私には判断できない。

だけど、そう深刻なものでもないような気がする。

「緑麗、蟠桃会は終わったのに、いつまでここに居るつもりなんだ？」

部屋の前まで送り届けてくれたはいいが、飛龍は不満も露にブスつとしている。

「仕事が終わる次第かな」

「だから、その仕事はいつ終わるんだ」

「それは、私じゃなくて西王母に言ってくれ」

「そうか、分かった」

と、くるりと背を向けるので、慌てて襟首掴んだ。

「いや、待て、飛龍。言葉通り取るな。そう焦らんでも、二、三日と言っていたから、そのうち終わるってば」

現在、私が請け負っている仕事の一環として、先代の天帝が遺したレポートの翻訳作業というのがある。

このレポートは、秘密保持のためか、ところどころ違った言語で書かれているのだ。

玉皇大帝は、相当、インテリだったらしく、扱う言葉は多岐に渡っていた。

今は失われた古代の言語とか、少数民族しか使用していない方言らしきもので使っているのも、とても自力では解読できない。

だから、私は色んな辞書や蔵書を漁ったり、誰その知り合いの言語学に詳しい閑人とかを捕まえては熱心に聞き回るといふ、試験前の学生のようになってしまったのだが、面倒な事に、私がこの仕事を請け負っている事や、そもそもこのレポートの存在自体が機密事項なので、誰かに尋ねる場合は、単語を抜き出したリ、別の文章にしてから解読してもらわなければならない。

今、西王母に頼んであるのは、かつて、紀元前に西域にあつたとされる王国で使われていた言葉の解読なのだが、蟠桃会で忙しかった彼女に無理は言えない。先日、年に一度の蟠桃会は恙無く終わったが、私がまだ西華に残ってるのは、そういうわけなのだ。

そして、飛龍が一緒に残ってくれているのは、私の『護衛係』と『送迎係』を元帥に押し付けられたからである。

飛龍にしてみれば、『元帥に頼まれた』という事実は相当気に入らないようだったが、内容は歓迎らしい。

それもこれも、飛龍がかつて緑麗を慕っていたからで、飛龍にとって、私の現在の名前や記憶はあまり関係ないようだった。

「何故あのオヤジはとつとと晶都に帰らないんだ」

まだ腑に落ちないという顔をして、飛龍がぼやいた。

「さあ？ 聞いてみたら？」

「聞けるかッ！ 第一、まともに答えるはずがないんだ、あのへタレ親父が」

「あ、そ……」

血の関係って、難しいよなー、と思う。

幸い、というか、不幸にして、というべきか、私は物心ついた時から血の繋がった両親は居なかったもので、飛龍のこの理由なき反抗は正直言って分からない。

とはいえ、私が見たところ、飛龍親子の確執は、それ程どろどろしたものではないような気がした。

(注1) 『竹里館』王維より。名月が来て、私を照らしてくれる——という意味。

(注2) ローマ神話における月の女神ディアナ（ギリシア神話ではアルテミス）が、夜闇の神ヘカテと同一視される事からきている。

## 2 赤帝君との喧嘩

水雲宮に戻ってから翻訳作業は地道に続けていたが、この仕事は別に急かさ  
れているわけではない。

納期がないのをいい事にかなりのんびりと、息抜きと称して陽輝と釣りをした  
りしていたが、その『釣り仲間』がある日突然居なくなった。

元帥に聞けば、無期限の有休を取って何処ぞへと行ってしまったらしい。

「む、無期限!? ……ってどれくらい!?!」

もしかしたら『半永久的』という意味かもしれない、と焦った。ここの住民達  
の『しばらく』とか『だいたい』とかいう言葉は、私の感覚とまるで違うのだ。

「さあ……、一ヶ月から百年の間くらいだろう」

そう答えたのは、恋人歴数ヶ月の天界軍総司令閣下、九雷元帥である。

別名『天界一性格の悪い高圧男』。

但し『恋人には極甘』というオプシヨンがつく。

「いや、せめて、もうちょい狭めて欲しいんだけど……」

この人だって、職場では相当エリートなはずなのに、こんな超アバウトな答え方をする。

つまり、これが、天仙界の方々の時間の感覚なのだ。

「もしかして、誰かと一緒に旅行にでも行ったとか……？」  
思い当たる節があつたので、そう聞いてみた。

以前、懸賞で当たった『世界一周豪華客船クルーズ』を、陽輝にあげたままになつていたのを思い出したのだ。

「多分、そうだろうな」

「ほ、ほーう、一緒に行く人なんて居ないって言ったのに、やっぱり、ちゃんと居たのね」

「さあ……、それも怪しいけどな」

「……？」

「旅行に行くために繁華街で即席の同伴者を作って、その後、一人で帰ってくる——というのが、西方軍の連中の読みだそうだぞ」

「良い部下をお持ちで……」

しかし、私も、それが一番濃厚な線って気がしてきた。

という事は、一ヶ月もしないで帰ってきそうだな。

元帥といい、西方軍の面々といい、まるで動じてないところを見ると、あの不良中年に関しては、こんな事は日常茶飯事って感じた。

今は、仮想敵も居ないみたいだし、天界軍の実働部隊の方々は暇をもてあましているくらいだから、大将自ら『ぶらり旅』に出で行ったとしても問題は無いって事か。

しかし、当面、私は昼間一緒に遊んでくれる人が居なくなってしまった。

ドクターの家でお茶をご馳走になるのもいいが、予約患者いっぱいの名医の仕事が邪魔するわけにもいかないし、九玄娘々は普段は帝都からは遠いところに居るので頻繁には会えない。

私と同じく無職の飛龍に崑崙まで連れて行ってもらおうという手もあるが、無許可で天仙界の境界越えをするのもちよつと気が引けた。

先の西華で行われた武闘大会において、一応、私は『官職免除の自由人』とい

う身分を保障されたが、それを証明できるような賞品を貰ったわけではない。

つまり、額に三日月傷があるわけでも、懐にクローバーの紋所があるわけでもないの、事情を知らないお役人さんに咎められた時は、名乗って説明するしかないのだ。

あの名前を公に名乗るのもあまり気分のいいものではないので、そうとなれば、面倒は起こさないに限る。

そんなこんなで、一緒に仕事をサボる人もおらず、何となく真面目に図書館通いをするといった日々を送っていた。

その日、図書館の帰りに四神府に顔を出したのだが、キサさんは不在だった。隣のオフィスを覗くと、紫凜が居た。赤帝君の秘書官で、お色気満載の美人だ。

最初は、よりによって、なんであのお堅い赤帝君にこんな妖艶な美女の秘書官？ と思ったものだが、仕事ぶりはこれでもかというくらいテキパキしてい

て、赤帝君も能力面ではこの秘書官を信頼しているようだった。

「まあ、緑麗様、いらっしやい」

紫凜は、いつもこの華やかな笑顔で迎えてくれる。

この笑顔が男性にしか向けられないのだとしたら、私も横目で通り過ぎるだけだが、彼女はその大きく開いた胸元に反比例して、同性にも同じ態度を取る。

「佑様（注1）は、鎮江楼にお出かけですわ」

紫凜嬢が、私がここに来た目的を察してそう言ってくれた。

「あ、やっぱり。相変わらず真面目に仕事してんのね……」

と言っても、私も、別にキサさんに特別な用事があったわけじゃない。何となく会いに来ただけだ。

「折角ですから、お茶でも飲んで休んで行って下さい。今、緑麗様のお好きなエスプレッソでも淹れますわ」

紫凜がそう言うので、赤帝君のオフィスに遠慮なくお邪魔した。

赤帝君も、キサさんと同じく任地と帝都を往復する毎日を送っているが、玄都を中心にしたあの南方の地は気候も穏やかだし、五行の流れも安定しているの

で、そうちよくちよく訪れる必要はないらしい。

赤帝君曰く「太上老君のお陰です」との事で、あの最高神のジーサマが居座っているせいで、異民族神魔も近付かない土地柄なんだそうだ。

「これは緑麗様。ご機嫌麗しゅう」

相変わらず、正装をきっちり着込んだ赤帝君が笑顔で出迎えてくれる。

仕事の邪魔をしに来ただけのプー太郎をこんな風に歓迎してくれるんだから、居心地が悪いわけではない。

しばらく、赤帝君と他愛のない世間話をして、エスプレッソ三杯飲んで帰ろうとしたら、

「今日は御一人なんですか？ 敖開様は？」

赤帝君が、窓外を見ながら言う。

「ああ、飛龍なら、今日はどっか遊びに行ったみたいだけど」

「なら、私が水雲宮までお送りします」

「いや、一人で帰れるし……」

と、断ろうとしても、赤帝君はもう太刀を手にして、ドアへ向かう。

「あー、えーと……、阿哥<sup>アールゴ</sup>」

私が否定的に声を掛けても、赤帝君の心は揺るがない。

「今日はもう大した仕事ありませんし、たまには、私にも本来の仕事をさせて下さい」

「……」

ちよつと今、赤帝君が言った『本来の仕事』という言葉に引つ掛かった。

四方将神の『本来の仕事』、それはすなわち、天の調整者たる四神の本能、である。

五行の氣の流れを正常に保つ事は彼等の存在理由でもある。

そんな彼等にとって、四方の中央に居座って五行を駆使し、乱す事のできる黄龍は、常に監視対象となる。

決して、『守護』とか『保護』の対象ではないし、『崇拜』とか『忠誠』の対象でもない。

少なくとも、私はそういう理解をしている。

だから、真面目な赤帝君が私の事を気遣うのは、厄介事を起こさせたら困るか

らなのである。

「……フウ」

軽く溜息ついたら、赤帝君が大真面目に言った。

「緑麗様は、一見平穩に見えるこの帝都で、ボデイガードなど必要ないと思われるかもしれませんが、貴女の立場では、いつ何時、危難が降りかからないとは限りません」

「そりや、確かに、天界の住民全てが私の味方じゃないってのは分かるけど……」

『黄龍の保持者』であるという事実や、『元将神』という肩書きが、私の意図しない所で、話題に上ってしまうのは承知している。

だけど、私が引っ掛かったのはそこじゃない。

（私を護っていいのは、一人だけだ——）

しかし、それをこの堅物に言っても、しょうがない。

「……じゃあ、色々寄り道して帰るけど、いいかな？」

諦めて、赤帝君の好きにさせることにした。

「勿論です。何処へともお供致しますよ」

私のプランでは、今日は一人で買い物や買い食いをして、最後にドクターの所で油を売るという予定だったんだけど、緋色の正装を着込んだ赤帝君が隣に居るせいで、周囲の視線を浴びてしまう。

言うまでもなく、四方将神は何処へ行ってもVIPである。

四神府は、組織としては軍部から行政からも独立しているので、四方将神は天帝の臣下でもないし、身分はかなり特殊と言える。

同じく四海龍王も立場は似ているが、官位を授かっているという点では天帝の臣下になる。

「……様？ 緑麗様？」

「あ、ゴメン。なに？」

鍛冶場の火を見つめていたら、ボーツとしていたようだ。

「お疲れなのではないですか？ 無理をされているようで、心配です」

「……え？ いや、そんな事ないよ」

「というか、これ以上ないってくらいに自堕落な生活をしてるんだけど……」

「お待たせしました、緑麗様」

奥から、鍛冶師のエイケイが出てきた。彼の手には、刀が一本。

「どうだった？」

「初めての経験でしたので、少し時間がかかりましたが。御覧下さい」

彼の差し出す日本刀を慎重に受け取って、型通りに抜いてみた。

私は、キサさん程の目利きではないけど、『コレ』がそこそこの値打ち物であるという事は分かる。

質実剛健な感じの、反りの少ない刀である。

納刀してから、頷いた。

「……素晴らしい。日本刀のノウハウも知らないのに大したもんだ。プロは所を選ばずだな」

「ありがとうございます。ですが、緑麗様が持ち込んだものが既に逸品揃いでした。その慧眼には恐れ入ります」

「お世辞はいい。適当に漁ってきただけだ」

火雲宮の武器庫には、古今東西、世界中のありとあらゆる武器が納められている。

さながら博物館のようだが、別に展示されているわけでもなく、案外、雑多に埋もれていたりする。

埃をかぶったウインチェスター銃の隣に、優美な青龍刀が、その隣には信管を抜いたトマホークが転がってる、という具合だ。

私が、元帥の許可を貰ってその武器庫から持ってきたのは、日本刀数振り。

どれも錆付いていたが、多分、鍛えなおせばそこそこ使えるのではないかと  
思って、この鍛冶屋に持ち込んだのである。

「私の見たところ、それが一番緑麗様のお好みかと思いましたので」

エイケイが、私の手にある日本刀を目で指して言った。

「実践向き、という事？」

「はい」

思わず、賛美の苦笑をした。

この老齡の鍛冶師には、私の性質が分かるらしい。

「他のも鍛えなおしてみますか？」

「いや、いい。一本あれば充分だ。プロが選んだ腕を信用するよ。コレは貰っていく」

そう言つて、鍛冶屋を後にした。

そのまま、南門を抜けて、湖沿いの公園に出る。

ずっと、赤帝君が何か言いたげに様子を見守っていたが、彼が口を開いたのは、水雲宮の門が分かる程に見えてきた頃だった。

「そのようなものが必要なのですか？」

彼が言っているのは、勿論、この刀の事だ。

「さあ……。差し当つては必要ないかもしれない」

「では、何故？」

「聖魔劍は大きすぎるんだよ」

わざと赤帝君の意図を反らすように答えたが、彼は引き下がらなかつた。

「私が言っているのはそういう事ではありません」

「分かってるよ……。でも、それじゃ、さつき阿哥が言った事と矛盾するよね？」

「どういう意味です？」

「『一見平穩に見える帝都』で、黄龍を鬱陶しく思ってる連中が居る以上、私は呑気に護られてるわけにいかないじゃないか」

「……」

「だとすれば、自分の身を護るのにこれは必要になる。聖魔劍は使いこなすのは難しい。咄嗟の時は、やはり使い慣れたサイズの方がいいからな」

「ですが、緑麗様が率先してそのようなものを持つのは感心しません」  
色々カチンと来たので、立ち止まった。

赤帝君は控えめなくせに、ハッキリとこういう事を言う。

私がここで「そうですか。じゃあ、私は大人しくあなた方に護られようと思いません」なんて言うっておけば、多分、会話は終わりだ。

しかし。

言わずにはいられなかった。

「私がかつての将神程強くはないという事が、赤帝君の心配の種になっているのなら、それは今の私にはどうしようもない。私の寿命が尽きるまでは、目を瞑ってくれ。どうせ、神仙の感覚では、すぐだろう」

「そういう事を言っているわけでは——」

困ったような顔で赤帝君が反論する。

しかし、黙ってる。私の話はまだ終わってない。

「弱いくせに武器を持つな、四方将神に任せて大人しくしている——というのが本音だろう？ だったら、赤帝君。貴方も、黄龍を厄介ものと思っている連中と同じじゃないか」

「私は決してそのような——」

この人は、私の無神経な言葉で、時として、途方に暮れた、捨てられた子犬のような目をする。

だけど、それが私を苛つかせるのも事実なのだ。

「確かに、今の私は非力で、周囲には迷惑も心配もかけてる。だったらいっそ何もしないでくれ、と周囲が思うのは当然だろう。だけど、それじゃ、私がここに

居る意味はないんだよ」

かたわらの静かな湖面が、まるで私達の険悪な空気に反応して、さざなみを立てているようだった。

だけど、実際、湖面を動かしたのは、そよ風で、その心地よい風も、すぐに別の場所へ行ってしまった。

「私は……、緑麗様が非力だなどとは思っていません。寧ろ、貴女は誰よりも強い方です」

「かつては、だろう。もしくは、黄龍込みでの話だ」  
自虐的にそう言ったら、赤帝君の目が吊り上った。

「そんな風に仰られるのでしたら——怒りますよ！」  
しかし、泣きそうな顔してそんな事言われても、私が困るだけだ。

「……」

「……」

気まずい沈黙と睨み合いの後で、赤帝君が先に折れた。

「すみません。出すぎた事を言いました。お赦しを」

「いや……、私もちよつと言い過ぎた」

水雲宮は見えているが、このまま我が家に戻るのは非常に後味が悪い。見えていた公園の東屋まで行つて腰を降ろした。

「……怒ってるんですか？」

「いや、そういうわけじゃなくて……」

調子が狂うな、ホントに。

「阿哥、私は護られた事つてのが無いんだ。その必要がなかったから。『人界』では、私より強い敵は居なかったから」

そう。黄龍と共にある限り、私は無敵だった。

しかし、『天界』では、この力は通用しない。

最強と言われる神獣、黄龍も、四方将神に囲まれてしまえば、その力を制御されてしまう。

「だから、そういう風に生きてきてないんだよ」

それを、いきなり切り替えろと言われても、無理な話だ。

「この前の武闘大会だって、私一人ではあの闘技場に立つ事すらできなかつたは

ずだけど、それだって、本当は溜息つくような想いなんだ。私は誰かに護られなきやならないような存在じゃなかったはずなのに——」

「緑麗様……」

「阿哥には分からないかもしれない。『最強』からいきなり『弱々』になってしまった私の気持ちは」

「そんなに、強くある事が貴女の望みなのですか？」

「……何だって？」

「地上で最強だったのを、天界でも同じようにお望みなのですか？ かつてと同じ強さがあれば満足なのですか？」

「……！」

なんか、またカチンと来たぞ。

野郎、痛い所突きやがって——。

「それでは、貴女が転生した意味が……」

「意味があるのか!？」

思わず大声出した。

「いや、意味なんて最初っからないんだ！ 緑麗には意味があつたとしても、私には意味なんかない！ この身体とこの魂で私は出来ている。私にとっては何れが全てで、意味なんかない！」

これじゃ、喚き散らす子供そのものだ。

でも、止まらない。

「緑麗様……。私達は、いえ……。私は、そんな風に思っています」

「じゃあ、貴方自身は、私にどうしろ、と!？」

「人形で居ろと言っているわけではありません。強大な力を一人で抱え込むのがそもそも間違っているという事です」

「……」

「かつての緑麗様は、孤独だったのだと思います。それを自覚してはいなかったと思いますが。いや、自覚せずに済む強さがあつたのかもしれないが」

「フン、"孤独"だと？ 一番、そんな言葉には縁の無さそうな脳天気ぶりは、私だって知ってるのに、何言ってるんだ」

「なら、貴女は孤独を感じた事はないのですか？ もし、黄龍の保持者でなかつ

たら——と、考えた事はないのですか？」

「……」

心の中で舌打ちした。

なんだ、この苛立ちは。言い返せない事が腹立たしい。

「かつての貴女は、それ故に、来世を望んだ。違いますか……？」

「そんなの、私に聞かれたって……っ」

「だから、転生しても尚、孤独であれば、意味がない、と——」

赤帝君が何を言いたいのか、大体分かってきたが、続きを聞きたくなかったの  
で、「帰る」と一言だけ言って背を向けた。

「……」

これは、我俣お嬢が付き人を困らせてる図かもしれないな。

でも、そんなの、知ったことか。

「強さが全てじゃない。だけど、誰がそのセリフを言える？ それは一番強い奴  
だ」

捨て台詞のように言って赤帝君を黙らせ、そのまま無言で歩いた。

困ったような付き人は数歩後をついてくるが、私は振り返りもせず、ずんずんと歩いた。

そうして、結局、顔を見ないまま水雲宮へ戻ったのだ。

(注1) 真武君の事。総じて「○○君」は敬称で、この場合、紫凜が「真武君」と呼んでも失礼にはならないが、格下の者は字(あざな)に様づけで呼ぶ事が多い。

### 3 こちら、地下実験室

火雲宮、北東エリア、地下ブロック——。

物理的にも五行的にも、行政から完全に切り離されたその一区画は『泰山府』（※役所名）と呼ばれていた。

もともと、『泰山府』というのは『冥府』と同義語である。

『泰山府』という名称が役所名となり、『冥府』が実際の死した魂魄の彷徨う場所の通称となったのは単に便宜上の事で、今でも年配の者などは同義語として使っている場合もある。

その『泰山府』の長であり、冥府の主でもあるのが、泰山府君である。

西洋風に言うならば、地獄の大魔王といったところだ。

また、泰山府君は、現在、四名居る『最高神』の一人でもある。

この『最高神』というのは、天界を一つの会社組織と見た場合、名誉会長のよ  
うなポジションと考えられ、天帝以外の三人（太上老君、太上道君、泰山府君）

は、火雲宮の表舞台には滅多に出てこない。

泰山府君も例にもれず、悠々自適に趣味三昧の毎日を送る隠居老人であった。長官としての仕事はほとんど事務次官に任せている。

泰山府の職員達も怠惰な者が多く、親方日の丸をいい事に最低限の仕事しかない。

中にはその最低限の仕事すらしない者も多く、日々のノルマは常時滞っている。

しかし、却ってその緩慢な仕事ぶりが、功を奏している部分もあった。

泰山府の主な仕事というのは、『人界』で死んだ者の魂魄を冥府へ誘導し、転生させる事なので、そのサイクルが早くなってしまうえば、地上に人が溢れてしまう事になるのだ。

この薄暗い地下ブロックは、全てが泰山府の敷地だったが、実際使われてる部屋はごくわずかで、長官室もガラクタ置き場のようになっていた。

尤も、本人に言わせればそれはガラクタではなく貴重な実験機器なのであるが、一般人が見てもそれらは使い方も用途も一切不明である。

その部屋で、窮屈そうに両羽を閉じているエメラルドグリーン色の鸞は、ガラクタの中に顔を突っ込んで何やら探しものをしている泰山府君を横目に、そこら辺に転がっていた雑誌を手に、いや、羽に取った。

この鸞、正式の名前を『ナンカイ・ホークス君参号』と言う。

とある事情でそんな妙な名前になってしまったのだが、その名前のせいで鷹と間違われる事がある。

が、れっきとした霊獣であり、知能も高ければ、五行力も高い。

ホークス君が暇つぶしにめくった雑誌の中身は、ほとんど興味のないものだった。

人間の女性の裸体写真など、彼にとっては生物図鑑でしかないからだ。

「確か、ここら辺にあったような気がするんじゃないかー」

泰山府君はブツブツ言いながら、もうかれこれ一時間も探しものをしていった。

いい加減待ちくたびれたホークス君が、雑誌を閉じて口を開く。

「あの日、あつしも早く戻らねえとお嬢に怒られますんで、見つからないなら、また後日っつーことで……」

「まあ、待てと言うのに。一日二日戻らんでも、大丈夫じやろう。明日は絶好の実験日和なのじゃ。これを逃すと、また数千年待たねばならん」

「しかしですねー、オヤツサン。あつしがこんな事に協力してるってのをお嬢が知ったら、ヘソ曲げられちますよ」

最高神である泰山府君に、霊獣であるホークス君がこんな気軽に口が聞けるのも、彼が泰山府君の娘に仕えているからである。

元々は泰山府君の霊獣だったのだが、泰山府君が第一線から退いたので、娘の碧霞元君へきかげんくんの方に仕えるようになったのだ。

「おお、あつたぞ！」

泰山府君は、ホークス君の愚痴は聞いていない。

ガラクタの中から目当てのものを見事に発見して、小躍りしていた。

「……で？ その懐中電灯で何をどうしろ、と？」

「これは懐中電灯ではない。若かりし頃のワシが冥府を創造した時、その瘴気が外に漏れぬようにと作った、『天空大風呂敷設置装置』じゃ」

泰山府君は、その小さな体を最大限にふんぞり返らせて、鼻息荒く、自慢し

た。

「いやー、これを稼動した時は、帝都中、いや天界の者全てが空を見上げて、溜息をついたものじゃわい。夜空に描かれたイルミネーションのように美しかったのう……。言っておくが、どこぞの『四角の外ミレナイオー？』なんて目じやないぞ」

しかし、ホークス君の方もまた、泰山府君の自慢話は聞いていない。

「で、あっしは、その大ホラ吹きで火雲宮上空を覆って、あの五色パワーの炸裂を抑えりやいいわけっすね？」

「……ウム。今回は四方将神を揃えるのは難しいからもう。そのための保険じゃ」

「なんで西華では失敗したんです？」

「まさか、あの緑麗が自ら勝負ごとを棄権するとは誰も思わなかったからな。〃  
転生すれば別の人間」と言った真武君は正しかったわい」

泰山府君は、溜息をついた。

西華の武闘大会で事が済めば、一番簡単だったのだ。

それなりの準備もしてきたし、あそこはうってつけの土地でもあったし、何よりその他の条件が全て揃っていた。

しかし、泰山府君の思惑は外れ、沙龍はあの優勝決定戦において黄龍召喚をしなかった。

「まあ、とにかく、明日は頼んだぞ。あくまでも『突発的事故』を装わなければならん」

「あんまり考えたくないんですがね、オヤツサン」

「ウム、何だ？」

「もし黄龍が暴走して、この大風呂敷だか、大ホラ吹きだかが上手く作動しなかったら、もしかして、帝都全滅なんて事になりやせんかね？」

「ウヒョヒョヒョ」

泰山府君が不気味に笑った。

「何がおかしいんですかあ」

「帝都どころか、今の緑麗が黄龍を暴走させれば、天界そのものがなくなるわい」

「ンなアホな……。やっぱ四方将神には全員事情を話して、来て貰いやしようよ」

「九雷に言わせれば、そうもいかない政治的事情があるらしいぞ。なに、心配するな。そのための『天空大風呂敷』じゃ」

「知りませんよ、あっしは……」

ホークス君は、そのエメラルドグリーンの両羽をすくめるようにした。

4 ラクガキは人に見せるものではありません

私はこの数日、水雲宮の書齋で寝泊りをしていた。

竜吉公主から預かった『昊ちゃんレポート補完バージョン』の翻訳作業が大詰めに差し掛かっていたというのもあるし、忙しそうな恋人がしばらく顔を見せないのも、わざわざ寝室まで行って寝る必要もなかったからだ。

元帥は、基本的には水雲宮で寝泊りをしているが、こんな風に数日放って置かれる事もある。

そういう時は大抵、遠出仕事なので、私は気にしていない。

むしろ、こんな時にちよつとホツとするのは私の方だった。

毎晩、フルセットに付き合うのは、人の身として、ちよつと疲れる時もあるのだ。

「何故、何の目的で——か」

悠花に淹れて貰った眠気覚まし用の濃いコーヒーを飲みながら、ノートにラク

ガキをしていた。

神獣がどこか全く別の場所から来た存在だと言うなら、そこには目的があるはずだ。目的がないとしても、原因は必ずある。そういう結論に達して、そういう前提で、私は『昊ちゃんレポート』を読み解いている。

しかし、玉皇大帝自身は、その点にあまり重きを置いていないので、このレポートは主に黄龍と麒麟の実態解明になっている。

このレポートによれば、黄龍が単品で東方天界に姿を現したのは、約四千年前。

その直後に、黄龍から分かれた形で、四神が現れたという。

そして、その四神がそれぞれの属性を強く持った天界の者と『四方将神』となったのだそう。

四神と四方将神の関係は、神獣とその保持者の関係よりも、はるかに濃密である。

保持者というのは、ハンドラーという意味に近い。

緑麗や玉帝がどうだったのかは分からないが、少なくとも私は黄龍に『変化』

したり『龍形態』になったりする事はできない。黄龍の力を自分のものとして使えたり、召喚したりできるだけだ。

が、四方将神達は簡単に『四神形態』になれる。

白帝君なんかはよくやっている。

そのうち、我が親友のキサさんも、緑亀みたいな姿で現れるんじゃないかと毎日ビクビクしているというのは冗談だが、いずれにしても、彼等、四方将神達は天界においてもちよつと特別な存在なのである。

麒麟が現れるまでの数百年間は、この状態で理想的な五行世界ができていたらしい。

つまり、単品の黄龍と、それを御する四方将神達、である。

しかし、黄龍をわずかに上回る力を持った麒麟の突然の出現が、全ての発端となった――。

それまで無害だった黄龍が、いきなり麒麟と対立し、両者は殺し合いを始めた。

恐らく、それは『生存競争』だったのだろう。

同種の力を持つ、同種の存在。

共存できぬ、相容れぬ存在。

その殺し合いの場に遭遇した玉帝と緑麗が、それぞれ、麒麟と黄龍を己の魂魄に封じる事になった顛末は、私も夢で見た。

『我々は当初より、天の力を調整する者として存在しています。それが麒麟であろうと黄龍であろうと、その役目は変わりません』

かつて赤帝君はそう言っていたが、黄龍を追って地上へ転生したという真武君や、表向きは天帝に刃を向け、その実は麒麟を討とうとした先代の青龍広君の事を考えれば、少なくともその二人は明確に“黄龍寄り”だったわけだし、赤帝君と白帝君も、最終的には黄龍を生かす事を選んだ。

麒麟は完全に置いてけぼりだ。

(という事は、麒麟だけが異端という事も考えられる……?)

思いつくまま、ノートに図式化したものを書いてみた。

東方青龍、西方白虎、南方朱雀――。

「……」

と、そこまで書いて、この前の一件を思い出した。

『朱雀』

南方を護る存在。

四方将神としての赤帝朱雀星君は、これ以上ないくらいに礼儀正しいし、女性には大人気のイケメンだ。

キサさんも、いつの間にか赤帝君とは打ち解けているようだし、白帝君も彼のことを阿哥と呼んでるくらいだから、信頼に足る人だというのは分かる。

しかし、私はこの前、この人に痛いところを突かれ、ムツとした挙句、喧嘩になっちゃった。

そういえば、白帝君が言っていた。

赤帝君は、昔、緑麗の事が苦手だったそうだ。

といっても、仕事上では特に問題なかったようだし、あの二人の間に特に因縁はないそうだけど、性格を考えれば、緑麗というのは、確かに赤帝君が苦手とす

るタイプなのかもしれない。

私の知ってる限りでは、緑麗は自由主義で個人主義で楽観主義者である。くだけた言い方をするなら、唯我独尊で、自分勝手に、脳天気である。

真面目な赤帝君にとってみれば、そんな人が上官だとしたら、距離も置きたくなるのかもしれない。

しかし、今の赤帝君は、私に対して距離を置いてる感じはしない。

むしろ、機会さえあれば、進んで世話を焼こうとしているのが分かる。

『そんなに、強くある事が貴女の望みなのですか……？』

『かつてと同じ強さがあれば満足なのですか？』

この前、そんな風に言われたのを思い出して、ますますムカムカしてきた。

なんか、胸糞悪い。

こんなの、もはや、四方将神がどうかいう問題じゃない。

まるで、強い女は嫌いだけど、弱い女は好きだ——と言ってるみたいだに聞こえ

る。

表面だけソフトにした、男尊女卑野郎の言いそうなセリフだ。

「……」

ラクガキしていた図式の、朱雀のところに矢印引っ張って『インケンタムシ』と書き込んだ。

ついでに、そのノリで四方将神全員に、愚痴のようなラクガキをガシガシ書き込んで、虚しい鬱憤晴らしをした。

はあ、疲れた。

九雷が水雲宮に戻ってきた時、沙龍は開いたノートの上で熟睡していた。

ペンを持ったままの姿勢で器用なものだが、九雷が注目したのはそこではない。

「……?」

ノートを覗き込んだが、落書きのようなそれは、ところどころ九雷には解読で

きない。

日本語で書かれているからだ。

ひとまず、沙龍を起こさないようにして、そのノートを腕の下から引き抜くと、九雷はしばらく興味深そうにそれを眺めていた。

翌日、火雲宮本殿での朝見の直後、九雷は入り口付近の廊下で木佐を呼び止めていた。

今から、午前の仕事に散っていく官吏達で、ちよつとした混雑になっているが、そのせいで、誰もこの二人の会話を聞いてない。

「聞きたいんですか……？ ホントーに大した事書いてないんですけど……」  
木佐は、多少呆れながら言った。

九雷から手渡されたノートには、お馴染みの豪快な字で、ラクガキとしか思えないものが書かれてある。

これが沙龍の字である事は分かるし、内容としても、沙龍以外には書けないだ

ろうと思うが、ちよつと口に出して読むのはためらわれる。

「沙龍はあまり仕事の進展の話をしないんでな」

「成程……」

つまり、恋人の全てを把握しておきたいけど、あれこれ聞きすぎて嫌われるのは遠慮したいという事なんだな、と木佐は理解した。

「何が書かれてる？ 玉帝のレポートの件か？」

木佐は、九雷が真剣な顔をしているのをからかいたくなつたが、それは今はやめておこうと思った。

「いえ……、単なるラクガキですよ。というか、僕に対するのは完全に悪口ですけどね」

と、木佐は、『玄武』の文字の上にかぶさるようにしてでかでかと書かれている『ゼニゲバ守銭奴』を指差して言った。

「……？」

「まあ、要するに、馨が四方将神達の事をどう思ってるのか、ものすごく直球な本音ってところですね」

木佐は苦笑しながら、次に、『青龍』のエリアに書かれた文字群を指差した。

「貴方に対する本音も、一見、悪口に見えますけど……」

「何て書かれてるんだ……？」

九雷は、今度は別の興味でそれを知りたい、と思った。

「えーとですね……」

『バカヤロー。一週間も放っておくんじゃねえよ。でも好きだあ——!!!』

「……と書いてあります」

木佐が平坦な口調で笑いを堪えながら言うと、九雷はしばし絶句していたが、「邪魔したな」

と、木佐からそのノートを受け取り、何事もなかったかのように去っていった。

勿論、二人とも、互いに背を見せた途端に、口の端を上げているのだが。

しかし、木佐の方はすぐに、その口元を戻した。

『白虎』のところを書かれたラクガキはどうという事はないが、『朱雀』のところには気になる事が書かれてあったからだ。

あの礼儀正しい赤帝君が何故沙龍の不興を買ったのか、木佐にはまるで見当がつかなかった。

5 帝都模様

四神府の木佐のオフィスは、何故か千客万来だ。

ここに一番よく現れるのは沙龍であり、次点は、その沙龍とよくつるんでいる陽輝大将である。

そして、三位入賞するのが、この赤帝君であろう。

いや、本来、隣の棟で仕事をしている赤帝君が一番になって然るべきなのだが、と木佐自身は思っている。

「今日は、緑麗様はいらっしゃらないのか？」

回覧書類を持ってきた赤帝君は開口一番、そう言った。

その言い方が、戸惑い気味だったので、木佐は例のノートの件を思い出した。

「……来たら逃げるのか、それとも仲直りするつもりなのか、微妙に判断しかねる言い方だな」

木佐にそう言われて、赤帝君もまた、木佐が何かしら知っているのだと分かつ

た。

「喧嘩しているわけではないんだが、実のところ、私にも分からん」

「何があったのかは知らないが、根に持ってはいないと思うぞ、馨の方は」

“インケンタムシ”だからな——、と木佐は苦笑した。

「ああ、あの方に悪意がないのはよく分かる」

「善意もないがな」

シレっと付け足す木佐の一言に、今度は赤帝君が苦笑する。

「真武君、緑麗様はもしかして、黄龍を排除しようとしているのではないか？」

「それは、僕にも分からないが……。何か気になる事でも？」

「黄龍を“厄介者”と思っっているのは、実は緑麗様自身じゃないか、という気がするのだ」

「それは……」

半分は真実だろう、と木佐は思う。

もし、『黄龍の保持者』ではなかったら——、という事を、沙龍が今までの人生で考えなかったとは言い切れない。

「馨が、黄龍を疎んじている、という事か？」

「いや、聖霄（※白帝君の字）の話では、その可能性が高い、というだけだ」

先日の西華での蟠桃会で、白帝君が言っていたのはあくまでも『推測』である。

いくら白帝君とはいえ、はつきりと読心できるわけではない。

まして、本人があまり知られたくないと思っている感情なら、ぼやけたイメージくらいしか読む事はできない。

「僕が今まで見てきた限り、それはないと思うが……」

「かつての緑麗様は、いずれ黄龍を元の世界へ帰そうと思っていた。いや、願っていた、と言った方が正しい」

「“元の世界”……？」

「そうだ。それがあるかどうかも分からんが……、緑麗様なりにあの力はどこか異質の力だと思っていたのだろう。しかし、今の緑麗様のお心は私には分からない。もし、一人で思い悩んでいるのだとしたら、それを誰かに打ち明けるような方でもあるまい。いきなり、黄龍を切り離そうとしてもおかしくはない」

「だが、その方法はないわけだろうか？」

「そうだ。だが、今、緑麗様には陛下より託された玉帝の調書がある。我々の知らない方法を知ったかもしれない」

「馨がやってる仕事の話か」

赤帝君は頷いた。

「しかし、仮に、馨が黄龍を放棄したとしたら、どうなる？ その方法があったとして、の話だが」

「具体的にどうなるのかは分らん。……が、少なくとも、我々にとって、歓迎できない状況にはなるのだろうか」

「そうなのか……？ 麒麟が現れる前の、一番理想的な状態に戻るだけだろうか？ むしろ、今の状態の方が問題だと思いが？」

「なら、真武君。お前は黄龍の保持者でなくなった緑麗様を、周囲がどう思うと思うんだ？」

「どうって……」

つまり、沙龍が何かしら怒っている原因は、赤帝君のこういった過保護にある

という事か、と、木佐は理解しつつ、

「普通の人間に戻るだけ……、ああ、そういう事か」

木佐は納得した。

沙龍は、『黄龍の保持者』だから、特別扱いとして天界で永住権を得たのだ。

もし、『緑麗の生まれ変わり』だけなら、大した特別扱いにならないだろう、と赤帝君は言っているのである。

そして、赤帝君は赤帝君なりに、その辺りを心配しているのだ。

「なら、聞いてみたらいい」

「は……？」

「馨に聞いてみたらいい。黄龍をどうするつもりなのか、を。それが一番話が早い。ついでに、仲直りもできるだろう」

「簡単に言うな、お前は——」

「言っただろ？ 馨は根に持っていないし、悪意も善意もない。昔は多少、必然に迫られて腹芸もしていたが、最近じゃ、天然バカ丸出しで、あれ程御しやすい人間もいないと思うが」

なにせ“インケンタムシ”程度の喧嘩なのだ、と木佐は思う。

「それが簡単にできれば、私はほうぼうで『堅物』なんて呼ばれていないだろう」

「だろいな」

と、口に出すつもりはなかったのに出てしまった。

しかし、赤帝君も微苦笑していただけだった。

自分のオフィスに戻った赤帝君は、すぐに出かける準備をして、制服に着替えた。

普段、赤帝君は自身の正装として緋色の衣を纏っているが、任地へ赴く時は、四神府のスタッフである事を強調するためにも着替えることにしているのだ。

紫凜がそれを見咎めて、門扉までついてきた。

「星様、緑麗様と和解されなくてよろしいんですの？」

「真武君と同じ事を言わないでくれ、紫凜。……玄都に行ってくる」

「はい……、お戻りは？」

「明日の昼か、夕方近くになるだろう。あとを頼む」

「分かりました。いってらっしゃいませ」

紫凜は、急ぎの仕事でもないので出かけようとする赤帝君の気持ちが何となく分かったので、それ以上は何も言わなかった。

一方、こちらは火雲宮北西の城壁である。

ここに設置された尖塔は、帝都の中では一番高い建物になる。

物見塔も兼ねていて、ここから帝都の全貌を見渡す事ができた。

「ウーン、やっぱり怒られるかな。……と言っても、旦那に見つからなきゃいいんだよな」

白帝君は、その塔の天辺に立ち、目当ての人物を探している。

と言っても、ほとんど目は使っていない。

自分の意識を広げるようにして、特定の『氣』を探しているのだ。

「しかし、この俺を使いっぱに使うとは、あの公主も食えねえよな……」  
そんな愚痴も、思わず出た。

先日、蟠桃会が終わって、任地に戻ろうとした白帝君は、金鑾斗闕に呼びつけられた。

『蟠桃会において本来禁止されている私闘を繰り広げた罰』——というお題目だったので、仕方なく行って見た、というのは建前で、内心は嬉々として向かったのは言うまでもない。

金鑾斗闕は“男子禁制の女の園”である。

可愛い女の子から人妻まで、女性が大好きな白帝君にしてみれば、夢のような『罰』であった。

しかし、結局は滞在時間五分で、こんな『お使い』を頼まれただけ——という、何とも間抜けな話である。

竜吉公主は美女は美女でも、『男嫌い』で有名だし、白帝君もそもそも、竜吉公主本人とどうこうという事は全く考えてなかった。

ただ、可愛い侍女の一人や二人と仲良くなれば儲けもの、と思っていただけ

なのだ。

「なんだこのやたら好戦的な『氣』は——、いや、待てよ……？」  
こめかみに指をあてて唸る白帝君は、その一瞬後に目を開けた。

『これ』は目で探した方が早いと思ったのである。

案の定、白帝君のやや上空に、見下ろすような形で飛龍が居る。

「この前の続きでもやりに来たのか？ 白虎」

飛龍が無表情のまま声を掛けた。

「そーゆーつもりじゃなかったんだがな、敖開よお」

「その名で俺を呼ぶな」

「おめーがそのつもりなら、喧嘩はいつだって買ってやるぜえ……？」

既に、白帝君の手には、『金行』を集めて、濃縮した塊がある。

「高いぞ」

「フン、ガキは大人しくママんとこにでも帰りな！」

「はあ、久し振りだねえ、帝都も」

西海龍王敖閏は、黒塗りリムジンから降りると、華やかな大通りを見渡した。朱雀門前には、こういったVIPが乗り付けるための車停めがある。

ここからは先は、さすがの龍王といえど、車で入るわけにはいかないのだ。

「どうも、賑やか過ぎて僕の好みじゃないんだけどねえ」

「少し早く着いたようですが、どこかにお立ち寄りになりますか？」

付き従う杜順少尉は、気を回してそんな事を言った。

敖閏は各地に愛人が居るので、挨拶に行かなくていいのか、という意味である。

「うん、まあ、それは会議の後でいいよ。……お、朱雀門にて朱雀様に出会おうとは縁起がいいね」

敖閏が、ちょうど城下町側に出てきた赤帝君を見て言うと、赤帝君も敖閏の姿を認めて一礼した。

「敖閏殿、火雲宮にお越しとはお珍しい」

「まあ、たまには出てこないかね」

この朱雀門を境にして火雲宮と城下町に分かれるのだが、赤帝君は城下町を抜け、そのまま帝都を出るつもりのようなだった。

「ああ、龍王会議ですね」

赤帝君は、年に一度のその龍族の会議が、ちょうど今頃だったという事を思い出した。

西海龍王はそれに出席するために、晶都から出てきたのだろう。

「そうそう。退屈きわまりない会議なだけども……、欽チャンが登城する数少ないイベントの一つだから、野次馬君たちは楽しみにしてるみたいだね」

と、敖閏は背後の杜順少尉をチラッと振り返って言った。

「奏欽様は、龍族一、いえ、帝都一の美姫ですから」

杜順が照れながら答えるそばで、赤帝君は、

(そうか……、今日は殿中で、奏欽殿に会えるかもしれないわけか)

ふと、任地へ赴くのはやめようか、と考えた。

どうせ大した仕事はないし、何となく帝都を離れたかっただけなのである。

しかし、今、赤帝君が思ったのは、美女を見るのも悪くはない、という意味で

はない。

赤帝君は、奏欽の兄、敖丁の所在を聞きたいだけなのである。

同じ『南』を司る者として、組織や所属団体は違えど、赤帝君と奏欽の間には多少の交流はあるし、直接訪ねていってもいいのだが、火雲宮で奏欽に会えるのならわざわざ南海龍王家まで行かなくて済む、と思ったのだ。

南方軍大将である敖丁は、ずっと帝都を留守にしたままなので、赤帝君は少し心配していた。

軍部に聞いたところで機密を教えてくれるはずもなく、安否だけでも確認したいのだが、奏欽が知っている可能性も、もしかしたら低いかもしれない。

(九雷元帥なら知ってるんだろうが、あの男に聞くのも……)

と、赤帝君が思った時、不幸にして、その九雷が黒焰虎で朱雀門前に乗りつけた。

「これは敖閏殿。ようこそ、帝都へ。……赤帝、お前は今から出張か」

全く違う態度と言葉で、二人に挨拶をした九雷は、略装の軍服姿だった。

「や、九雷君。蟠桃会ぶり」

VIPともいふべき三人が門前で鉢合わせるのも珍しかった。その時、三人が同時に空を見上げた。

北西の一角で、火柱のようなものがあがったからである。

「……まあ、何してんのかねえ、あの子は……」

一目瞭然なのだが、敖閏は言ってみた。

赤帝君は、かすかに肩を震わせている。

「聖霄……、あの馬鹿者が……っ」

九雷も、一度溜息つくように頭を抱えたが、その一瞬後、目の端に妙なものを見つけていた。

朱雀門の向こう側、つまり火雲宮側の通りを走り去った小さな影。

更に、今、火雲宮上空で繰り広げられている派手な喧嘩とは全く反対の方向に見つけた鸞の姿に、九雷は何かを確信した。

（あれは、泰山府君の……、いや、今は碧霞元君の靈獣だったな……）

そういえば、ここ最近、あの鸞が単独で帝都上空を飛んでる姿を何度か見かけた。

九雷は、携帯電話を取り出しながら急いで黒焰虎に乗り込んだ。

「……………うわちやー」

火雲宮の敷地内にある図書館から出てきた沙龍は、逃げ惑う人達を見て何事かと思ったが、すぐにその原因が分かった。

空を見上げれば、馴染みの二人がまたしてもハタ迷惑な喧嘩をしている。

「ウーム……………」

三秒くらい悩んだが、沙龍はくるつと背を向けた。

「かーえろ」

しかし、

「待て待て待て、コラコラコラ」

何か、沙龍の足を引っ張っている者が居る。

者——というより、それは小動物だった。

「……………?」

沙龍は、今喋ったのはこの小動物だろうと思った。

普通ならありえない展開だが、天界住民となって数ヶ月、沙龍の感覚もそろそろ普通じゃなくなっている。

「……どちらさんで？」

沙龍がそう聞くと、その小動物はふんぞり返って答えた。

「心の目で見よ」

「ロツキー・○ヤツク」

「フツ……、お主の心の目は死んでおるな。しかも、それは野ネズミじゃあああ  
あ！」

ゲシツ！

と、ネズミのようなその小動物は、一メートル以上の垂直ジャンプをして、沙龍の後頭部に捻りの入った一蹴を入れた。

「こ、このムササビ！ タダモンじゃない！ はるばる二メートルジャンプを  
!？」

「さり気なくサバ読むなよ。この百四十五センチが。それと、野ネズミでもムサ

サビでもない。この姿は、『魔法少女ガチャガチャ・ピン』に出てくる、ラブリーな使い魔、ムツ君じゃ！ 知らんのか、嬢ちゃん。視聴率五十パーセントをたたき出しているあの番組を」

「だってテレビ見ないもん」

「何故ワシがこのキュートな姿に変身しているかというところじゃ……」

「あー、まあ、どうでもいいわ、そこら辺は。じゃ」

再び背を向ける沙龍に、自称ムツ君が、今度は足技をかけて引き倒した。

「人の話は最後まで聞けというのに！」

「どわっ！」

簡単に転ばされた事に、沙龍は驚いた。

体術は得意な方だし、背後からの攻撃には全て咄嗟に反撃できるような訓練を受けてきたというのに、である。

「若いギャルに大人気なのじゃ。大抵のギャルは、この姿で居ると『可愛い』と言って、抱っこしてくれるのじゃよ」

「ほー……」

「ギヤル達の豊かな胸元に埋められて、頬擦りされるのはたまらんのう。窒息しそうなくらいが至上の幸せじゃ。……というわけで、通りを歩く時はこの姿が病みつきになってしまったのじゃ」

「へー……」

「……」

「ふーん……」

沙龍は適当に相槌打ちながら一服したり、漫画を読んだりして、ムツ君の話をまるで聞いていなかったが、いざ、ムツ君が、

「まあ、嬢ちゃんのような洗濯板は願い下げじゃ」

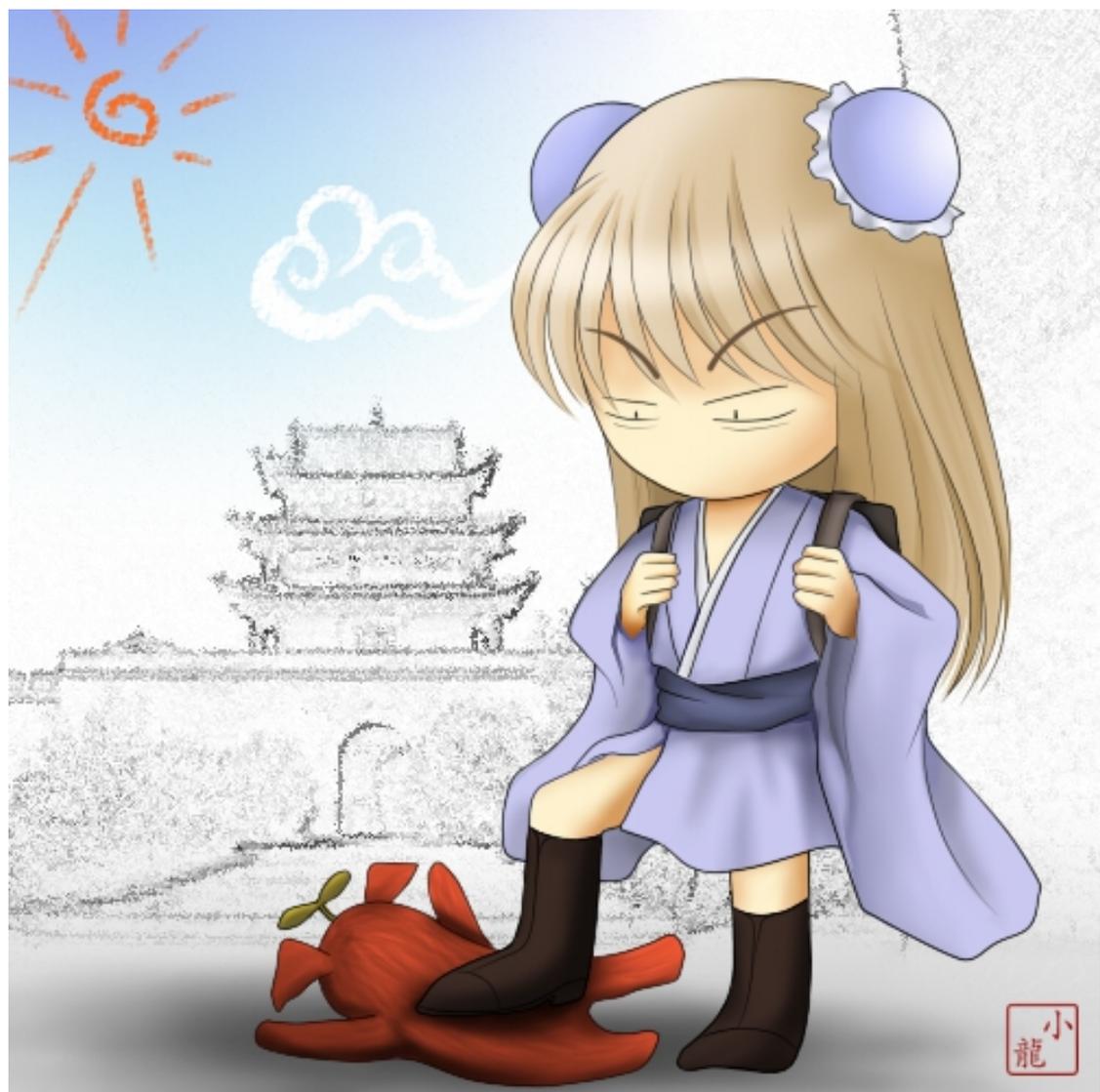
ボソつと言った時は、即座に胴体ごと踏み潰した。

「ゴルア、はよ本題話さんかい」

「ああ、そうじゃった。……のう、嬢ちゃん、あれを止めずにして帰ると言うなら、明日のおまんまは美味くないぞ？」

と、ムツ君は小さな指で上を指す。

飛龍の放ったロケットランチャーが、どこかに着弾して爆風を起こしていた。



「生憎だが、慈善事業にさわやかな汗を流すより、死体を前に乾杯する人生だつたんでね」

「世も末じやのう……」

「あの二人はあれで楽しんでるんだろう。拳と拳でしか分かり合えぬ仲なのさ……。それを止めようなんざ、野暮だぜ、泰山府君先生」

沙龍が芝居がかった口調でそう言うと、ムツ君、いや、泰山府君はヤレヤレと溜息をついた。

「嬢ちゃん、性格悪いのう……」

「私は官吏でも何でもなし。火雲宮が壊れようが、知ったこつちやないし」

「何故じゃ？ 嬢ちゃんならサクツと出来るじゃろうが」

「そうじゃなくて。貴方の真意が知りたいと言ってるんですよ、泰山府君先生。

今にして思えば、西華の武闘大会にも何か細工しましたね？ そんなに黄龍を出現させたいんですか？ 一体、何のために？」

今度は真面目に言うと、泰山府君は不敵に笑った。

「理由が必要か？」

飛龍はランチャーの弾切れに舌打ちし、更に、地上に宿敵を発見して唸った。

「クソツ、バカ親父め、アイツまで何しに来たッ！」

「オイ、敖開！ よそ見してんじや——」

そう言う白帝君も、飛龍の視線の先を追って、そこに赤帝君が居るのに気付いた。

飛龍が西海龍王に標的を変え、金磚（寶貝のひとつ）を放ち、朱雀門付近も戦場と化す。

辺り一帯は、バトル・ロイヤルの様相を呈してきた。

「嬢ちゃんは何を恐れておる？ 過去のトラウマか？ 暴走した時に制御できぬかもしれないという恐れか？」

「……」

そこまでストレートに凶星を指されては、沙龍は黙るしかなかった。

『黄龍召喚』を暗に要求する泰山府君の意図はまだ分からない。

「それとも、黄龍の真の力を見せつける事によって、起こるかもしれない無用な争いを案じるためか？」

「……」

それも、なくはない。

昔も今も、いつもトラブルの原因となるのは、この『力』である。

大通りに居た通行人達は、叫び声を上げながら避難しているが、沙龍と泰山府君は微動だにせずに向かい合っていた。

「心配は要らぬ。まず、この件について生じる損害については、ワシが全面的に保障しよう。政治家達を黙らせるだけの力は、まだワシにもあるつもりじゃ」

「では、黄龍が暴走したら？」

「しないじやろう。するはずがない」

「何故言い切れる？」

「それを証明するために、その新しい身体で黄龍を喚ぶ必要があるのじゃ」

「何故——？」

「今は分からなくてよい」

「……」

勿論、沙龍とて、泰山府君に何か一計がある事くらい、分かる。

しかし、いくら最高神に名を連ねる神が全てを保障してくれたとしても、自分の行動の全ては自分に跳ね返ってくるのだ。

「では、せめて、四神を揃えてくれ。全員とは言わない。もしもの時に、制御できる人が居なければ、黄龍は喚ばない」

「結構、慎重派じゃのう……。それも心配要らぬというのに……」

泰山府君は、思案するように小さな両手を胸の前で組んだ。

しかし、その時、

「沙龍、俺は此処に居る」

背後に、静かに響く声が聞こえた。

振り向くまでもなくその声が誰で、どんな顔をしているのか私には分かる。

そして、それを確認するかのように振り向いた。

彼はいつから居たんだろう。

いつものようにまるで動じていない顔で、いつものように落ち着いた声音で、息一つ乱れていないのに、それでも、私はこの人が急いで此処に来てくれたのが分かる。

「理由は後で話す。今は、泰山府君の言う通りにしてくれ」

元帥が言った。

「……分かった」

彼に頷いてみせて向き直ると、泰山府君はムツ君の姿のまま、やさぐれて煙草を吸っていた。

「現金なやつちゃ。ワシの言う事はきかずに、鶴の一声で動く、か」

「下がって下さい、泰山府君先生。巻き添え食らっても知りませんよ」  
年寄りの愚痴は無視して、目算でこの大通りの距離と幅、そして上空までの距離を量った。

最悪、建物の一部か全部を破壊したとしても、住民達は大体避難しているようだから、大丈夫だろう。

『“蒼血の沙龍”の操る黄龍は全てを薙ぎ払い、全てを破壊するもの——』  
上海ではそう言われていた。

まるで、化物扱いだが、そう言われても仕方がない結果しか生まなかつた。

私が黄龍を召喚すれば、敵味方関係なく必ず死人が出たし、私の手を離れて暴走する黄龍に、私自身も何度も殺されかけた。

それをいつも、最終的に治めていたのは董天だった。

青龍の力を持つ者。

唯一、黄龍を制御する事のできる者。

しかし、董天は、結局、『代替者』に過ぎなかつたのだ。

今はここに『本物』が居る。何も心配は要らないはずだ。

「後は頼むよ、お二人さん。私はどうせ、最後には気を失う」

「“二人”？ ワシは何もできんぞ？」

「ジーサマには何も期待してません。……キサさん」

「分かってる。後は任せろ」

頼もしい親友の声が背後に聞こえたので、もう、私の不安はなくなった。

多分、元帥が呼んでくれたんだろう。

キサさんが今、帝都に居てくれてよかった。

体内を巡る全ての『土行の氣』を額の一点に集中させ、最高値まで高まるのを待った。

私は、黄龍を厄介だと思った事は一度もない。

生まれた時から共にあったこの力を、否定した事は一度たりともないんだよ、赤帝君！

「我、唯一の神獣にして無二の存在、黄龍の全ての力を解放せり——！」

「僕ちゃん、ここはあまり派手な喧嘩をしていい場所じゃないと思うんだけど  
〜?」

屋根の上に立つ敖閏は動かないので、いい標的になっているのだが、飛龍がどんな攻撃を仕掛けても、無傷のままだった。

彼の作り出す水の幕が、全ての攻撃を防いで、跳ね返しているのである。

飛龍にとっては、喧嘩相手が増えた事はどうでもいいが、敖閏が相変わらず本気ではない事に、苛立った。

「聖霄！ 今すぐ、このバカ騒ぎをやめろ！」

敖閏とは別の建物の屋根に立つ赤帝君は、何とか説得しようとしているが、白帝君は聞く耳を持たない。

「悪いが、ここは引けねえな！」

右手から迫る飛龍の火炎槍を気合で弾きながら、さらに流れてきた金磚の光弾を薙ぎ払う。

「火雲宮に被害が出たら、……っ!?!」

その時、赤帝君は後頭部を何かに打ち抜かれたような錯覚を覚えた。

空気の弾が通り抜けていったような、覚えのある感触だ。

これは、『土行』の塊である。

しかも、普通の土行ではない。他の四行を引き寄せる圧倒的な強さを持った、黄金色の輝きそのものである。

「緑麗様……!?!」

さらに、赤帝君は、この『土行』の流れの中に、自分に対する明確な叫びを聞いた。

勿論、その土行の奔流は白帝君も同じように感じた。

「阿姐!?!」

白帝君は今までの戦闘をパタリとやめると、人型に戻って地上へと着地した。既に、昼間の空が、変色を始めている。

「おいおい、前触れなしに、いきなりか。一体、何がどうなってんだよ、阿哥!」

「まさか、ここで『実験』をする気か……?」

「何だあってえ——!?!」

「……？」

飛龍は、風火輪（寶貝のひとつ）を作動させたまま、空中で滞空している。ただならぬ気配は、飛龍にも理解できたようだ。

敖閏も、険しい顔で紫色に染まっていく空を見上げた。

「……まさか」

そして、帝都を覆う空が日食に見舞われたかのように一瞬で黒くなった。

「たーまやー！」

ナンカイ・ホークス君は、その神獣が姿を現すと、まるで花火見物をしている客のように叫んだ。

しかし、すぐに首を振って、言い直した。

「いや、違った。ここは“かぎや”にしとくべきか。仮にも黄龍様だ。あの黄金の下に“たま”なんかつけちまったら、放送禁止用語になっちまわあ！ カーカッカッカ」

一人、いや、一匹で悦に入っているホークス君は、帝都北端に位置する大極殿の上に居た。

ここは火雲宮の中でも、最重要エリアと言ってもいい。

どんな霊獣も、この大極殿の上空だけは飛ばないようにしているくらいだ。

今、黄龍の姿を見て何やらハイになっているホークス君も、警備スタッフに見つかれば即投獄されるだろう。

「さてと。面白おかしい冗談もこれくらいにしねえとな。第一、お嬢が聞いてくれなきや、意味がねえ」

ホークス君は足元に設置済みの機械のスイッチを入れた。これは連動スイッチにもなっている。

帝都の東西南北に設置された『天空大風呂敷設置装置』が、同時に、薄い膜のような線状の光を放ち、夜空と見紛う黒い空に十字を作り、サーチライトのように黄龍を照らした。

ゆったりと遊泳するような黄龍の背景をオーロラのように彩る『天空大風呂敷』。

その光景は、ただ、美しかった。

「ほー、成功したようじゃのう」

小動物の姿のまま、泰山府君は満足そうに空を見上げた。

黒い空に浮かび上がった黄龍の姿は、破壊神とは程遠い。

「あれが……黄龍？」

木佐は、黄龍の姿を見た事は過去二度ある。

一度は日本で、一度はつい数ヶ月前にこの火雲宮で。

しかし、今、見上げている神獣は、過去の二度とは比べようもない程、優美だった。

まるで別の生き物なのではないかと思える程、イメージが違う。

凶悪さの一片もない、純然たる神獣。

「あれが、真の黄龍の姿なんだよ」

朱雀門付近でこの光景を見ていた西海龍王は、誰にといいないのでなく言った。い

や、飛龍に言ったのかもしれない。

何故なら、赤帝君も白帝君も、それを知っている。

麒麟が出現する前の黄龍の姿をこの二人は知っているからだ。

「……ッ!？」

その時、風火輪で滞空していた飛龍が、急にガクンと垂直落下した。

「な、なんだッ？」

風火輪が作動しなくなったのだ。

同時に、白帝君も急に身体が重くなったと感じた。

「おかしい……、なんか、おかしいぜ、阿哥」

言われた赤帝君も、やはり異変は感じている。

「ああ、嫌な予感がする……」

黄龍が、ただ、火雲宮上空を遊泳しているだけの光景だ。滅多に見れない神獣の姿に驚く事はあっても、何があるはずがない。

まして、今、神獣は『唯一無二』、黄龍しか居ない。対立していた麒麟は滅びたのだ。

「大体、なんで阿姐は黄龍を喚んだ……？ 泰山府君に何か弱みでも握られて、言いなりになったのか？」

「それは、多分、違うだろう」

「何だよ？ 意味深に笑いやがって。何か知ってんのか？」

「いや……」

赤帝君は、先程の怒りにも似た沙龍の叫びは、自分への解答でもあるのだと気付いた。

『私は、生まれた時から黄龍と共にある！』

悲痛なまでに、沙龍はそう叫んでいた。

「……!？」

ふと、赤帝君は、自分の右手をかざして見る。

かすかに透けているのが分かって、ギョツとした。

狐につままれたような顔をしている飛龍も、肩を回している白帝君も、何が何だか分からぬこの異変にどうしているのか分からないようだ。

この四人の中で、物事を正しく理解していたのは、西海龍王だけだった。

「『これ』こそが、黄龍の真の力……。全ての人為的・靈的・作為的・動的な力を、無に帰す力……」

「それは、まるきり反対ではないですか、敖閏殿。黄龍の力は、『土行』そのものの。全てを育む力のはず——」

「そう？　全てのものには表裏がある。君の力だって、全てを焼き尽くし、全てを灰に変えてしまう圧倒的な力でもあり、また、あらゆる生命を育み、再生を促す力にもなりうる。同じことでしょ、赤帝君」

赤帝君は、微妙に顔をしかめた。

いつだったか、これに似たことを誰かに言われた事があるような気がする。しかし、悠長に議論している場合ではない。

飛龍は地面に倒れ込み、白帝君も、分けの分からぬ顔で片膝をついていた。全ての力が抜けていってしまうような感覚なのである。

「何が起こってるんだよ——？　一体——」

「…… “無に帰す力”？」

赤帝君は、今、敖閏が言ったその言葉を繰り返した。

敖閏は、それについては説明せず、ただ、今は動静を見守るしかない、と  
思っているようだ。

「緑麗ちゃん、願わくば、僕らの存在する力まで奪っていかないで。いや、泰山  
府君に言うべきかな」

九雷は、その光景を黙って見守っていた。

今の沙龍は、何かに憑依されていると言っていていい程に、顔つきも、その発するオーラも、いつもの沙龍とは違った。

闇の中に光る小さな沙龍の身体はほとんど動かない。

そして、沙龍の閉じた瞳が何を映しているのか、泰山府君の知りたい事はそれだけだった。

「見えるな？ お主の通ってきた道が」

小動物の姿を借りた泰山府君は沙龍の足元に座っていたが、沙龍が何か小さな声で言ったのが聞こえず、小山を登るようにして沙龍の肩までやって来た。

「……ここは、知ってる」

寝言のように、沙龍が呟いている。

泰山府君の声は聞こえていて、それに答えようとしているのは分かるが、何か

に邪魔をされて言葉がうまく出てこないようだった。

その間も、黄龍は天空をゆっくりと浮遊している。

「何が見えている？」

「知ってる……この場所……。黄龍が、まだ黄龍じゃなかった時の場所……」

「黄龍と麒麟が生まれた場所——じゃな？ 空か？ 海か？」

「……水は、見えない」

沙龍は少し苦しそうな表情で、今見えているものが何なのか、必死に思い出そうとしていた。

その景色は、沙龍の記憶にはない。

緑麗の記憶にもない。

しかし、黄龍は知っているのだ。

数千年前に通ってきた道を、黄龍は覚えているはずなのだ。

泰山府君は、一つの仮説を立てていた。

黄龍と麒麟が全く異なる世界から来た存在で、知能（もしくはそれに類するもの）を持つのなら、記憶（または記録と呼ぶべきもの）もあるはずである。

だとすれば、二匹の神獣が東方天界に現れた目的も、原因も、神獣自身が知っている。

それを知るために、泰山府君はこのような『実験』を計画し、実行しているのだ。

そこには、科学者としての泰山府君の好奇心もあるし、冥府の主としてのわずかながらの責任感もあるのだが、何より秦帝からの要請があつたのだ。

『もし、黄龍を保持者生存のまま切り離せる方法があるなら、私も緑麗も、それを知っておかなくてはならない——』

泰山府君は、その若き統治者の判断を支持した。

『その上で、緑麗が保持者である事を辞めるか続けるかは自由だ。何も、私が保持者にとって変わりたいわけではない』

しかし、それが政治的には一番丸く収まるのだろう、と誰もが分かっている。

秦帝も、本心ではそれを願っているのかもしれないが、それも、私利私欲から

ではなかった。

(まあ、ワシの読み通りなら、諦めてもらうしかないんじゃないやがのう……)

泰山府君は、はるか太古の時代、黄龍が出現するよりも更なる昔に、『冥府』を創造した。

生と死を司る者として産まれた泰山府君は、主に表の秩序を太上老君や太上道君に任せ、自分は裏側に回る事にしたのだ。

しかし、若き泰山府君は、冥府創造の過程において、一つミスをした。

最下層地獄のエリアに、通気口のような小さな穴があったのを、自然にできたものだろうと放って置いたのである。

穴自体は確かに自然にできたものだったかもしれない。

しかし、それは日増しに大きくなって、そのうち、妙なものまで呼び寄せるようになってしまった。

だから、泰山府君は、その穴の周囲に木々を巡らせ、封印したのである。

「まあ、色々じゃな。消しゴムからロケットの破片、はたまた生ゴミまで。当時の地球科学では存在しないものばかりじゃった」

泰山府君は“妙なもの”について、そう説明した。

「つまり、どっか別の空間とつながってしまったんじゃない。それが『未来の地球』なのか、『どこかの宇宙』なのかは分かんない。しかし、その穴を観察してるうちに、数百年、数千年何もあんなにない時もある年、ある年は大量に同じようなものばかり漂着するという現象が起きてる事が分かった」

それは、まるで、大地震が起きる時のような現象だという。

最初は小さな余震が断続的に続き、だんだん大きくなって、ある瞬間に最大最強の揺れが来る。そして、また、しばらく余震が続く、といった具合に。

その最大最強の揺れというのが、

「黄龍が出現した時と、麒麟が出現した時じゃ」

「……なら、もう間違いはないのでは？」

今回の『実験』の概要を聞かされた九雷は、泰山府君にその現場まで連れて行かれて、そう確信した。

扶桑の木が何本も巡らされたその場所は、最下層地獄というだけあって、もはや一条の光も射さない場所だった。

時折、魔物のような黒い物体が二人に襲い掛かってくるが、最高神と天界軍元帥の前には返り討ちにあって消滅するだけだった。

「創造主にはむかうとは、いい度胸じゃ」

「そういう風にお創りになったんでしょように」

納刀しながら面倒臭そうに言う九雷は、『余計なオプシヨンまで設定しやがって』とも言っているようだった。

九雷は、泰山府君とは多少の縁があり、同じ最高神でも太上老君に対するよりは感情を顕わにしていた。

「しかしのう、九雷。黄龍も麒麟も、出現したのはあの『黒の森』じゃ。それがずっと謎でのう……」

「この穴から現れ、さらに冥府内を通って『黒の森』に出た、という事では？」

「だとしても、説明がつかん事が二つある。まず、この扶桑の木じゃ。もし、神獣が封印を破ってこの穴から出てきたというなら、扶桑の木は破壊されていたり、倒れていたたりするはずなのに、それがなかったという事が一つ。さらに、もう一つは、黒の森までの道筋じゃ。冥府の出入り口は一つしかない。そこを通ら

ずして、どうしてもあの巨体が『黒の森』まで行けるといふのじゃ？」

「……さあ、それを解明するのは、私の仕事じゃありませんので」

「……」

「……」

「お主、最近、ますます性格悪くなったのう……」

「それはお褒めの言葉として受け取っておきます。それで、具体的にはどうやって立証するおつもりで？」

「ウム。時間を遡って、『本人』に聞いてみるしかない」

「『黄龍』に、ですか？」

「そうじゃ。今の緑麗なら、できるじやろう。黄龍を召喚さえしてくれればな」

「何故、今ならできるんです……？」

泰山府君が、仮説を立てながらも、かつての緑麗が保持者だった時代にはこの実験ができなかった理由が一つある。

最大の理由である。

そのために、泰山府君は緑麗が別の人間に転生するのを待ったのだ。

「それは、いずれ分かるじやろ」

苦しそうに歪む沙龍の横顔を心配そうに見つめながら、九雷は泰山府君が言っていた『理由』が何なのか、理解した。

『私は、生まれた時から黄龍と共にある！』

沙龍が黄龍を召喚する直前、言葉にこそしなかったが、叫んだその胸のうちには、自分に対するものではなかったが、九雷には分かったのである。

緑麗は、黄龍と出逢い、保持者となった。恐らく、それを事故だと思っていた部分があるだろう。

しかし、沙龍は生まれながらにして保持者なのだ。

そこに、決定的な違いがある。

そして、沙龍には、愛憎と言ってもいい程の強い想いがある。

『黄龍は、私を生かし、殺すもの』

沙龍は、そう思っているのだ。

「暗い、闇の底……、ここを通った……」

「何が見える？」

「フ……、ソウ……」

「扶桑か!？」

泰山府君は、興奮を隠し切れずに沙龍の肩の上で跳ねた。

「扶桑の木じゃな!？」

黄龍は『天空大風呂敷』によって、動ける範囲と、力を制御されているのだが、それもそろそろ限界だった。

ホークス君の足元にある機械は、先程から妙な音を立てている。

「おいおいおい、勘弁してくれよお。オヤツサンは絶対大丈夫って太鼓判押ししてくれたけど、もしぶっ壊れたら、どーすんでい、これ」

ただでさえ目付きの悪いホークス君の目がますます険しくなつて、足元の懐中電灯のような機械と、上空の黄龍を交互に見はじめる。

すると、懐中電灯に、嫌な感じの小さな亀裂が走った。

ジジツという音は相変わらず続いている。

「……ヤ、やばくねえか？ これ」

最悪の場合は天界そのものがなくなる——、そう言っていた泰山府君の言葉を思い出し、ホークス君は焦った。

「あゝ、やっぱ、あの時、お嬢ん所にチャツチャと帰っておくべきだったぜ。空山に籠ってりや、何とかなつたかもしんねえのによお」

「……天空山？ 泰山のことか？」

「そうそう。そうなんですよ、ダンナ。聞いてくださいませよ、お嬢ったら、可愛い反抗期なもんで、オヤツサンの名前を冠したあの山を、素直にはそう呼びたくないんでさあ……、って誰!？」

ホークス君が飛び上がって驚いた時、木佐は懐中電灯の様子を見るためにしやがんだ。

「これは、もうもたないな」

「つて、えくくくくくつ!! そりゃ困るつすよ! あっしだつて、まだやり残した事が山ほど! せめて、お嬢が白無垢着るまでは、あっしは死んだつて死に切れねえ! ……いや、えつと、で、誰? いや、どこのどなたさんで?」

ホークス君はパニックってまくしたてるが、木佐は落ち着いた様子で立ち上がった。

「僕は木佐小次郎。ところで、この装置だが……」

「……キサコさんで？」

「切る位置が違う。ところで、これは、同じものが四箇所を設置されてるのか？」

「え、ええ。そ、そうです。あとの三つは自動制御でして……」

「なるほど、これで四方結界を作っているわけか。大したもんだ」

ホークス君は、木佐が何者かという事よりも、その端正な顔に目を奪われて、黙った。

天界に居れば美男美女など見慣れるが、その見慣れている人達の視線を釘付けにするのが木佐小次郎なのだ。

「そんで、その、キサコさんは、あのく、何の御用で……」

「だから切る位置が違うと言ってるだろう。……まあ、これが壊れても、大丈夫か。ちようど今、全員揃ってる」

「揃ってる……って、何がですかい？」

「四方将神が」

そこで、やっとホークス君は気付いたのだ。

美女だと思っていたキサコさんが、実は男で、その“四方将神”の一人である事に。

(そ、そういや、今の真武君は最近になって天界に戻ってきた、転生組だって話を聞いたな……)

「……ぐツ」

沙龍が、初めて苦しげに呻いた。

「もう少しじゃ。嬢ちゃん、意識を手放してはならんぞ」

保持者が意識を失えば、神獣は確実に暴走する。

だから、暴走させないためには、意識がある状態で、保持者の魂魄に戻す必要があるのだ。

しかし、召喚するだけでも多大な精神力と体力を要するのに、その後、数分間、そのままの状態を維持するのは難しい。

意識朦朧とする中、自分の手を離れた黄龍が周囲を破壊しつく様を、沙龍は何

度も見てきたのだ。

「もういいでしょう、そろそろ限界です」

九雷はたまらず近付いたが、泰山府君は譲らなかつた。

「いや、肝心のルートを聞いていない。どこなんじゃ？ どこに、冥府の最下層地獄から、黒の森に抜けるルートがある？」

「……っ」

沙龍は答えない。

瞳はずっと閉じたまま、青い顔をしてじっと何かに耐えている。

「そんな事が分かったところで、今更何になると言うんです！ 好奇心を満たすためだけの答えが欲しいなら……！」

語気を強めた九雷を制したのは、意外にも沙龍だった。

「待って……、分かる……、大丈夫だから……」

「沙龍、無理するな！ こんな酔狂でハタ迷惑な老人にこれ以上、お前が付き合う必要はない！」

「本音だな……」

じつとりと九雷を見るムツ君は、それでももう潮時か、と諦めた。しかし、そこで、沙龍はパツチリと目を開けた。

まるで、今までひどい悪夢を見た、というような顔である。

「ゾンビ！ あのゾンビは冥府から這い出してきたんだよ！」

「は？ 何言つとるんじゃ……？」

「分かった——。あそこに『龍脈』がある。いや、元は龍脈だったも……の……

……あ、悪い。もう、限界……」

それだけ言つて、沙龍は空に片手をかざしたまま、フラッと仰向けに倒れ込んでしまった。

九雷はそれを予想していたかのように、沙龍の身体を支える。

「何か気付いた事があるようじゃ。まあ、暫くは休ませてやれ。後日、詳しく聞いてみるわい」

泰山府君がそう言う頃には、昼間の明るい空に戻っていた。

その場に居合わせた人々は、まるで狐に化かされたような顔のまま、ざわめく事も慌てる事もなく、元の時間、元の場所に戻っていた。

「まさか、時間すら、リセットしたという事か……？」

赤帝君は、改めて、雲一つない青空を見上げて言った。

「多分ね。しかし、四方将神はその影響を受けないって事かな」

「……。なら、貴方や敖閏様は？」

赤帝君は、眉をひそめて敖閏を見た。

「僕達は龍族だからだよ、赤帝君」

敖閏は、赤帝君の疑惑の視線を流して、まだブーツとしている飛龍を立たせた。

「ホラ、しっかりして、僕ちゃん」

「あ？ そういや、親父、なんで帝都に居るんだ……？」

「会議だってば」

「ああ……」

西海龍王は、ネクタイを直しながら朱雀門の中へと入っていく。

「阿姐、大丈夫かなー」

白帝君が、そんなことを言っていた。

10 黄龍は電気ウナギの夢を見るか？

その時の感覚をどう説明したものか、というと、巨大ローラーでスライムのようにグニヤグニヤにされた後、シェーカーでさんざん振られ、荒波の海に放り出された挙句に電気ウナギに巻きつかれ、泳げないはずなのに夢中で泳いで泳いで泳いで、ゴミのように打ち上げられた先は無入島どころか、自分ちのベッドだったという——夢オチ？

いや、そんなわけはない。

ここが水雲宮の天蓋付きベッドの上だというなら、私は十年分の寿命をあげてもいい。

我が宮殿のベッドはこんな硬くてゴツゴツしてない。

(何処だっけ……？　ここ……)

私は今、覚醒寸前の、レム睡眠状態にあるはずだ。

早く起きなくちやいけない、と思ってる。

だけど、意識を失う直前まで、私のそばには元帥が居たはずで、何があつたとしてもあの人に任せておけば安心と思つていたので、それ程危機感を感じてはいなかつた。

しかし。

「……おーい、死んでんのか？」

おぼろげに聞こえるその男の声は、知り合いのものではない。

トキメキ度0ポイントくらいなの、どうつてことのない声だ。

「まあ、生きてても死んでてもどっちでもいいんだけどよ……」

しかも、やる気のなさだけは誰にも負けないというくらい、けだるさを撒き散らしている。

「しかし、何だつてこんなところに、人間が紛れこんでんだ……？」

(……)

私はもう完全に覚醒していたが、様子見と油断させるために寝たふりをしていてた。

どうやら、元帥も泰山府君も居ないようで、周囲に感じる気配はさつきからブ

ツブツ言ってるこの男一人。

声の聞こえ方からして、しゃがんでいるようだ。

「どうせ人型の女なら、もつと人妻系とか、OL系とか……、え？ ああ、すいません、独り言です。……照合できたんですか？ で、誰です？」

(……?)

「ええっ？ こんな、小汚いガキが？ ……って、そりや勿論、それは知ってますけど……。すいません、ボス、聞かなかった事にしていいすかね？ それ」

(……マイナス十ポイント)

「はあ……。しかし、大ボスなんて、俺は顔も声も知りませんよ」

冷たい気温の中、ザワザワと木の枝が揺れるような音がしている。

という事は少なくともここは屋内ではないということか。

私は今日、何を着て、何を持っていったっけ？ と、思い出しながら、小さな電子音と男の溜息が聞こえたのと同時に、動いた。

「……なっ!？」

男の、驚愕の瞳と、白っぽい手だけ見えた。

今、私の方に伸ばそうとしていた男の手首を掴んで、手前に引っ張るようにして地面に縫いつける。

「うおッ……!?!」

そして、バランス崩して、前のめりになった男の身体を膝で押さえつけると、帯の後ろに差し込んでいた聖魔剣を抜いて起動させ、男の鼻面一センチの所に突き立てる。

これで、九十九パーセント、私が優位だ。

「ちよ、ちよっと待った！俺は——」

「何者だ？」

「お、俺はっ、ただの公務員で……!」

「ここは何処？」

男を拘束したまま、改めて周囲に視線を巡らせてみる。

今見えているこの風景が信じられなくて、苛立つように繰り返した。

「何故……? ここは何処!?!」

濃い群青色の夜空に、白い小さな点々が見える。あれは高層ビルの窓の電光

だ。

数ヶ月前にはよく見ていた風景。

「私は帝都の大通りに居たはずだ。それが、何故新宿に居る？」

「……？ さあ、それを俺に聞かれても……」

地面に突き刺された聖魔剣のせいで顔を動かせない男が、もそもそと答えている。

見た目はかなりオッサンに見えたが、この世界ではあまりそれは関係ない。若く見えようが年寄りに見えようが、大抵、皆、数百年、数千年を生きている。

外観は全体的にヒョロ長い感じで、今、私が膝できつく押さえつけている背中も、栄養取ってなさそうな、貧弱な感じだ。

モサモサの黒髪はあまり手入れされてないようだが、不潔な感じはしない。

そして、何より、命を握られているのに、あまり緊張感がないのが気になった。

大人しく観念しているのならいいが、反撃のチャンスを伺っているのだとしたら、油断ならない。

「……ここは、何処？」

最後通牒のつもりで、男の右手を踏みつけている足に力を入れた。

「冥府。最下層エリア、B-29地区……と答えれば、せめてその足はどけてもらえるのか？」

「質問はあと二つある。その答え次第では、足もどけるし、この剣もおさめてやろう。……お前の名前は？」

「信じてもらえるかどうか分からないが、『公務員』だ」

「はあ？」

「だから、それが俺のコードネームなんですよ、緑麗様」

「……質問が一つ増えた。何故私が緑麗だと分かる？ さっき言っていた『照合』とやらか？ 髪の毛か指紋でも採取して、鑑識にでも回したってか？」

「あんた、サスペンスもの見過ぎじゃ？ 送ったのはただの写真だ」

「写真？ つまり、お前は可憐な少女の寝顔を盗撮したってわけか。……マイナス五十ポイント」

「何だ、そのマイナスポイントって」

「合計百になると、もれなくブチ殺す。ちなみに今、六十だ。言動には気をつけろよ、公務員」

「殺すも何も、俺、死んでるんだけどな。もう」

「……？ ユーレイなのか？」

「泰山府の職員なんて、みんなそんなもんだ」

「普通、死ぬと魂魄が離れて、肉体の方は朽ちるんじゃないのか」

「まあ、そうなんだが……、説明すると長くなるが、聞きたいか？」

「いや、いい。さっきの続きの方を聞こう」

「……えーと、どこまで言ったっけ？ ……ああ、俺が本部に送った写真ね。

ちよつとそれのせいで騒ぎになっちゃったみたいで。『上』じゃ有名らしいな。

えらい美女だった将神が、似ても似つかないミクロサイズで戻ってきたって話は」

「……マイナス五十万ポイント」

公務員のモサモサ頭を、引き抜いた聖魔剣の柄で軽く殴った。

「痛ッ！」

「つまり、私は冥府に飛ばされたのか。シヤレコーベの上に寝てたつても、気分悪いな」

よく見ると、地面は無数の骸骨で埋まっている。ゴツゴツしていたのは当たり前か。

公務員に殺意がないのは分かったので、とりあえず、拘束状態からは解放した。

「にしちや、全然動じてないな？」

軽く頭を振って、のそのそと立ち上がった公務員は、汚れてるんだか、元からそんな色なのか、ドドメ色のコートを着ていた。

改めて見ると、くたびれたサラリーマンそのものといった感じだ。

「それはそっくりそのまま返すぞ。冥府のお役人つてのは、修羅場慣れしてんのか」

「まあ、こんなのがウロウロしてるからな……」

私達を窺うようにして、三メートルはあろうかという獣のような物体がうごめいている。

さつきから、ザワザワと木の枝が揺れるような音がしていたのは、この化け物の触手の音だったのか。

「殺していいのか？ それとも、これはお前の仕事か？ 公務員」

聖魔剣を構えると、公務員はドドメ色のコートの下から、ハンドガンを取り出していった。

その慣れた手つきと、ハンドガンの使い込まれた感じからして、やはり相当場数は踏んでいるようだ。

「これは、大ボスが『冥府にはこういう化け物が居なくちや様にならない』って理由で作ったクリーチャーらしい」

「大ボス？ ああ、泰山府君先生のことか……。なんか、あのジーサマには、襟首掴んで問い質したい事がいっぱいあるような気がするぞ……」

「ところで、もう一つの質問って何だ？」

公務員が、迫り来る化け物に発砲しながら聞いてきた。

「黄龍は……」

化け物の咆哮と、銃声で聞こえなかったらしい。

「えー!? すまんが、聞こえ……」

その間にも、公務員は突進してくる化け物を身軽にかわしている。任せておいても大丈夫そうだったが、一応、手伝う事にした。

と言っても、こんな猪突猛進型なら、聖魔剣のパワーがあれば一撃で済む。

公務員に気を取られて脇が完全にお留守になっている巨体を真っ二つに切り裂いて、塵にした。

聖魔剣の凄さに驚いているのか、それとも、私の腕に素直に感動しているのか、啞然としている公務員に振り返って、言った。

「黄龍は、電気ウナギの夢を見ると思うか？」

「ハア……?」

公務員が、何を言ってるんだこいつは、という顔をしていた。

一方、帝都の大通りでは、泰山府君が針のむしろに座らされているような心地で、部下と電話で話していた。

九雷が、沙龍の意識を失った身体を抱きとめたのと同時に、その沙龍が忽然と消えてしまったのだ。

この『実験』に不安要素は一つもない、と随分前から自信満々に言っていた泰山府君に対して、四方将神達が批難の目を向けるのも当然だろう。

「だ、だから、『レベル4扱いで』と言っておるじゃろう。早くせい。真武君が怖いんじや。ワシはこのままだと確実に殺される」

電話向こうの部下が、いつものごとくのらりくらりとしているので、泰山府君は『レベル4』を強調した。

すると、急に泰山府本部の方もどよめき立つ。

冥府存亡の危機を表す『レベル4』にあっては、普段さぼりがちな泰山府の職

員達も重い腰をあげざるを得ない。

「と、とりあえず、指示はした。後は現場に任せるしかないわけじゃが……」  
電話を切った泰山府君は、冷や汗をたらしながら四方将神の面々にそう説明した。

一番凄い形相で泰山府君を睨んでいるのは木佐だった。

赤帝君と白帝君は、泰山府君に対して文句を言うのはとりあえずやめて、その木佐を宥める役に回っている。

九雷は、先に木佐がハイパー・モードになってしまったために、出鼻を挫かれたという感じだ。

「どういふことか……最初っから、説明してもらいましょーか……ッ」

「い、いや、待て、真武君。これはハプニングなのじゃ。ワシの落ち度ではないぞ」

「ホウ？　つまり、貴方ともあろう人が、この予想外の事態を予測できてなかったと？　確か、『黄龍召喚実験による損害は皆無』とか仰ってましたよね？　馨が消えたのは『損害』に入らないとでも？」

「お、落ち着け、真武君」

「玄ちやくん、頼むから、その怖い蛇しまつて」

木佐の背後にワサワサと動いている無数の黒い物体は、本来の玄武の姿の一部、という事になるのだろうか。

「……真武君、お前の怒りは尤もだがな。一応、ソレでも、天界の最高神だ」  
九雷がそう言うと、木佐は泰山府君の首を締め上げていた手を幾分緩めた。

「九雷元帥……、貴方はよく落ち着いてられますね。このイカレたジジイのせいで、馨がどんな危険な目に合ってるか分からないってのに！」

「ソレって……イカレたって……、ゲホ」

「沙龍には、俺が保険を掛けている。ひとまず命の危険はないはずだ」  
そういう事か、と木佐は納得した。

九雷の余裕の態度にはちゃんと理由があるのだ。

「しかし、泰山府君。何故、冥府なんです？」

九雷がそう聞くと、泰山府君は咳払いをして答えた。

「ウム……、推測じゃが、黄龍に時間を逆行させたのが原因かもしれん。あと考

えられるのは周期の問題じゃな」

「周期？ 前に阿哥も言ってたが、その周期って何だよ？」

白帝君が口を挟んだ。

「冥府は、理論上は天界と同じ時間軸、同じ地続きの場所にある。しかし、実際には隔離された異空間の中に漂っているのじゃ。そうしないと、魂魄が勝手に出入りできてしまうからな。つまり、冥府は三界の間を近付いたり離れたりしながら、ゆっくりと移動しているのじゃよ」

「惑星と衛星のように、か？」

「そうじゃ。そして、今、ちょうど、四千年前に黄龍が天界に現れた時と同じ配置になっておる」

「つまり、天界と冥府が接近してるって事か」

「ウム、だから絶好の機会だったのじゃ」

「と言ってもよ、泰山府君。俺にはイマイチ分かってねえんだが、黄龍がどうやって現れたかったのを実証できたとして、どうなる？ 今更それを知ったところで、阿姐の負担が減るわけでもねえだろ？」

「まあ、緑麗にとっては何の益もないかもしれないが、第二、第三の神獣の出現を防ぐという意味があるのじゃ」

「フーン……」

「まあ、いずれにしても」

と、会話の流れを切るように木佐がもう一度、泰山府君に刺すような視線を飛ばした。

「馨の無事を確認して、助けに行くなり、戻ってきてもらおうようにするのが先です」

「わ、分かっている。そう睨むなというのに……」

火雲宮の本殿近く、立派な門を構える管弦府に赴いた西海龍王は、そこから出てきた美女に笑顔を向けた。

「欽ちゃん、久しぶり。迎えに来たよ」

「敖閏様、わざわざすみません。今、行こうと思っていたところです」

少し小柄なその女性は、薄紅色の着物がよく似合っていた。

漆黒の髪と、頭に飾られた黄金の冠も、見事な対照をなしていて、美しい。

この色の冠をつける事が許されているのは、天帝以外では第一位の官位にある者のみとされていた。

すなわち、四海龍王である。

奏欽は、年若い自分がこの冠を被る事に、躊躇いがあった。

だから、普段はつけていないし、登城自体を遠慮している。

奏欽は、南海龍王であると同時に、管弦府の長官も兼任しているのだが、管弦府の仕事は宮中イベントの時くらいしかないし、それも普段は部下に任せていた。

『引き籠もりの龍王公主』と陰口叩かれているのも知っているし、経験不足の自分が『龍王』を名乗っている事を快く思っていない者が居るのも承知しているが、それ故、あまり華やかな公の場には出てきたくないのである。

しかし、奏欽が引き籠もっている本当の理由は、他にあった。

それを、敖閏は知っている。

「さつき、大丈夫だった？」

「ああ、神獣ですか……。不思議な体験でしたね」

奏欽も、先ほどの一幕は管弦府の部屋の窓から見ていた。

周囲のスタッフ達が動揺する中、その数分後には何事もなかったかのように、整然とした秩序の中に戻っていったのは、何とも奇妙な現象だった。

「何にせよ、荒れそうですね。こんな事が起こった後の会議ですから……」  
奏欽は憂鬱そうに言った。

何故、出席者の四分の二が退屈以外の何物でもないと思っている会議をしなればならないのか。

それが伝統だと言われれば、奏欽は黙るしかない。

管弦府の長官になった時も、意味のない古いしきたりを辞めさせようとしたが、全てを一新する事はできなかつた。

改革には痛みが伴うのだ。

その痛みを越えた先にあるものが最良とは限らないと主張する老人達を、奏欽は説得できなかつたのである。

長官としての裁量で独裁してもよかったのだ。実際、他の府ではそうやってい  
る者も居る。

しかし、奏欽は元々の性質が優しすぎたのかもしれない。

龍王としての英才教育を受け、護身術や権謀術数ですら学んだのに、閑職府と  
まで擲揄されている一つの組織を自分の思い通りに動かす事もできなかつた。

奏欽の父、先代の南海龍王はよくそれを嘆いていた。

才能も容貌も申し分ないのに、野心だけが欠ける、と。

しかし、それでも、奏欽の父は嫡子の敖丁ではなく、末娘の奏欽に龍王位を継  
がせる意思を曲げることはなかつた。

「欽チャン、最近、二胡も月琴も弾いてないの？」

ふと、西海龍王がそんな事を聞いてきた。

龍王家というのは東西南北に別れてはいるが、もとは同じ祖先を持つ親族であ  
り、西海龍王敖閏も、奏欽にとってみれば「遠い親戚の伯父さん」という感覚  
だった。

奏欽は小さい頃から敖閏に懐いていたし、奏欽に二胡を教えたのは他ならぬ敖

閨である。

今では敖閨を越える腕前のはずだが、奏欽がその素晴らしい腕を披露する事はほとんどなくなってしまうた。

『引き篋もりの龍王公主』に加えて、『楽器も弾かぬ楽師』に何の価値があるのだろうか、と奏欽は自分でも思っている。

「ええ、まあ……」

奏欽が楽器を弾かなくなってしまったのは、人前に姿を現さなくなった理由と同じである。

敖閨は、直接、奏欽からその理由を聞いたわけではないのだが、大体の事情は察していた。南海龍王家の内部事情である。

しかし、今では『笑わない美女』だの『ふくれっつらのプリンセス』だのと言われている奏欽も、一時期は、非常に生き生きとしていた。

あの頃のように、また笑ってくれればいいのに、と敖閨は思っている。

敖閨のその思いは純粹に親戚の伯父さんとしての心配で、女性には手の早い敖閨も、子供の頃から知っている同族の女の子はさすがに『浮気対象』にはならな

いらしい。

「欽チャン、結婚はもうしないの？」

「その話ですか？ 父にも再三言われてますけど……」

奏欽は苦笑した。

こう見えてもバツイチなのである。

「僕なんてもう何回したのか分からないくらいしたけど、何回やってもいいもんだよね♪」

「そう言えるのは敖閏様くらいのもんです。大抵、一回やって、一回失敗したら、懲りるんですよ」

「そんな悟る歳でもないくせに」

そんな話をしながら歩く二人は、当然、通行人達の視線を嫌という程浴びている。

敖閏はただでさえ目立つが、奏欽はそれ以上に目立つし、容姿だけでなく、二人の『龍王』という地位がさらに拍車をかけていた。

しばらくすると、東海龍王家がサロンとして使っている洒落た建物が見えてき

た。

そこが『龍王会議』の会場なのである。

奏欽は、これから行われる憂鬱な会議に溜息をついた。

12 公務員の義務は、給料分働く事です

「一つ問題がある。公務員」

襲い掛かってきたヒグマのような化け物を一刀両断して、一息。

「あ？ ……なんだ？」

振り向くと、ベンチで呑気に一服している公務員。

「てめーは！ さっきからちつとも働いてねーだろが！ その『本部』とやらに案内する気あんのか、ゴルア！」

「いや、だって、俺がやるより緑麗様がやった方が早いっうか？ その方が合理的っっていうか？ 心配せずとも、ちゃんとご案内しますよー、それが俺の仕事だしー」

ガシツと胸倉掴んだら、わざとふざけた口調で返してくる。

「ヘイ、オッサン？ 人の忍耐力には限界というものがある。こんな、一見、箸より重いもの持ったこともないような女の子にあんな恐ろしげな化け物と戦わせ

て、大の男が仕事もせず一服だと？ 舐めとんのか、わりやあ」

「い、いや、だって、実際は違うでしょ？ 大の男が持ち上げられそうにないそんな凄惨な刀振り回してるし、実際、強いし、あれくらい恐ろしくも何ともないとか思ってるでしょ？ ホントは」

「貴様の態度が気に食わんと言ってるんだ！」

「あー、嘘でもチャホヤしろって事か？」

何か、ムカ、ときて黙った。

いや、違うな。

この前の、腹立たしい赤帝君の言葉を思い出したからだ。

別に、こんなくたびれた公務員にチャホヤされたいわけじゃない。

他称イケメン赤帝君にチャホヤされたいわけでもない。

そんなの、どっちかというお願い下げだ。

でも、例えば、今ここに居るのがキサさんや元帥だったら、私はこんなに一生懸命、化け物を切り刻まなくてもいいわけで……。

キサさんなら、半分はノルマとして受け持ってくれるし、元帥だったら、全部

やってくれるはずで……。

いや、今これを考えるのはやめよう。

「ハラヘツタぞ。緑麗様の接待係、何か食うもの持ってないのか」

「あー、こんなので良かったら……」

と、公務員は飴玉を差し出した。

「……。お前は大阪のオバチャンか。バッグに飴ちゃんは必需品か」

「何だ？ オオサカって」

説明するのも面倒だったので、その飴玉をひったくって、口に放り込む。

ささやかな糖分補給で、少しだけイライラも収まった。

「でも、それ錯覚だぜ」

「何だって？」

「お腹が空いたと感じるのは、『そうであるはずだ』と考えるからであって、ここには時間の流れはないからな」

「時間がない……？」

「ああ。この最下層に時間という概念はない。表層部には多少はあるがな」

「じゃあ、さっきまで私に見えていた新宿の夜景も、今のこの上海の風景も、全部錯覚か？」

「多分な。あんたの記憶の中の景色が再現されてるだけだろう。俺にはまた別の風景が見えてる」

「フム……。なら急いで戻る必要はないって事か」

皆が心配してるだろうから早く戻らないと、と思っていたが、時間が止まっているなら何もそんなに急ぐことはない。

「とりあえずエリア支部まで戻って、そこからエレベーターで地表の本部まで送ってやるよ」

「いや、待て、公務員。ちよつと確かめたい事がある」

「……？」

「お前はこのエリア担当なんだろう？　ここいらに『龍脈』があるはずなんだが、知らないか？」

「リュウミヤク？　何だ？　それ」

「……知らないのか」

「聞いたことはないな」

「じゃあ、扶桑の木ってのは何処にある？」

「扶桑の木？　もしかして、あの伝説の事か？」

「伝説かどうかは知らんが、この最下層エリアにその扶桑の木があるはずなんだ」

「扶桑の木の向こう側にはブラックホールが広がっていて、超S級の亡者がぞろぞろ居るとかいう話だろ？」

「なんだ、この反応は。」

「下っ端役人には、神獣が冥府の穴から出現した、という事は知らされていないのか。」

「ブラックホール、か……」

「ランクAの亡者だって厄介なのに、ランクSなんて願い下げだ、俺は」

「ちよっと待て。『亡者』って何だ？　さっきからしつこく襲ってくるこの化け物のことか？」

「と、さっき倒したヒグマのような化け物の尻尾が一本残っていたので、それを」

指差した。

「これは大ボスがお遊びで作ったクリーチャーだつて。まあ、粘土細工みたいなもんだ。魂魄は持ってない」

「亡者は魂魄を持つてるのか」

「というか、魂魄体の成れの果て——だな」

「……？」

「冥府に送られてくる魂魄は、三界問わず、全て『死んだ』ものだ。肉体を持たず、魂魄体の状態で漂ってるのが普通で、それらは、大抵、自分が死んだ事に気が付いていない。そして、再生工場か廃棄工場のどちらかに送られる事になる」

「再生工場？　つまり、そこで転生するってこと？」

「そうだ。で、廃棄工場というのは、転生を望まない、または望んでもそれを許されない魂魄が行く場所で、ここでは魂魄は完全に廃棄処分される。俺達はそれを『完全な死』と呼んでる」

「文字通り、無に帰すという事か。……しかし、何故、転生が許されない魂魄が

あるんだ？」

「さあ。そこら辺は上がやってる事なんで、俺は知らないが」

「ふーん。裁判みたいなもんがあるのかな……」

ちよつと好奇心をそそられるような話だったが、公務員はそれ以上は本当に何も知らないようだったので、話を元に戻した。

「で、亡者ってのは結局、何なんだ？」

「ああ、どこの世界にもハミ出し者が居てな。たまに、自分が死んだ事を自覚して、自らの意思で工場行きを拒否する魂魄体ってのあるんだ。それが、『亡者』になっちまうのさ。これが結構あちこちに漂ってるのが冥府で、その亡者を狩るのが俺達の主な仕事になってる」

「転生も完全な死も嫌だつて事だろ？ 好きに漂わせておけばいいじゃないか」

「そうもいかないんだわ、これが。なにせ、奴らときたら、普通の魂魄体を餌にしてしまうもんだから、害虫みたいなもんでね」

「フーン……。しかし、あちこちで漂つてると言う割には姿が見えないが？ 出てくるのはクリーチャーばかりで……」

(ン……？ 待てよ……？)

私はふと、ある事を思い出した。

以前、黒の森探索をしていた時、私が『土行』の気配を消すと現れたあのゾンビ達だ。

やつらが冥府から這い出してきたものだという事は、簡単に推測できる。何故なら、黒の森と冥府は龍脈で繋がっているからだ。

黄龍がかつて作った龍脈が、ゾンビ達の通り道になっているのだ。

「それが、不思議なんだよな。俺も今日はさつきから一匹も亡者に会ってなくて、おかしいな、とは思ってるんだが……」

公務員の呟きを聞きながら、私は、あの時と同じように『土行』を抑えてみた。

私の考えが正しいなら、ここで、ゾロゾロと亡者が出てくるはずで――。

「ゲッ!？」

公務員が周囲を忙しく見渡した。

「やはりそうか」

黒の森に現れたあのゾンビは、冥府から這い出てきた亡者だったわけだ。奴らが嫌うのは『土行』。

だから、私が『土行』の氣を撒き散らしている限り、出てくる事はない。

「公務員、よかったな。仕事だぞ」

「どこがいいんだ!? こんな大量の亡者、一人で相手した事ないぞ!」

チラッと私を見る公務員の涙目が、有無を言わさず私の参戦を期待している。

「というか、まさか、あんたが呼び寄せたのか? だったら、あんたが何とかしろよ!」

「そんな事できるわけないじゃないか。イカタコじやあるまいし」

ちよつと思ふところがあつたので、公務員の様子を見る事にした。

「イカタコ?」

「……あれ? イカ焼き、だったかな。タコ焼きだったかな」

「激しくズレていくぞ。イタコって言いたいんだな」

「そうそう、それぞれ」

「……」

「給料分くらいは働けよ。でないと、世間様に叩かれるぞ、公務員」  
まあ、私はさつき随分働いたから、ここは休ませてもらおう。

『冥府』――。

死者の魂が行く魑魅魍魎の世界。

日本語では『地獄』、梵語では『奈落』。

そんな愉快な場所に一体誰の陰謀で飛ばされてしまったのか、といえば、あのジジイしか居ないわけだが、奇しくも、泰山府君の目的と、私の請負仕事は部分的には合致している。

つまり、黄龍は何故、どこから来たのか――という事だ。

泰山府君が何故それを知りたがっているのかは分からないが、私は秦ちゃん陛下から頼まれたという理由以外に、全く別の観点から、それを知りたいと思っている。

「死ぬッ、これは確実に死ぬ！ ……いや、俺、死んでるんだっけ」

私がそれを知りたいと思っっているのは、もう、黄龍が私の一部だからだ。

生まれた時から当然のようにあったこの力は、私の手足であり、守護神なのだ。

たまには喧嘩もするし、鬱陶しく思う事もあるけど、だからこそその『友』なのだ。

「ひええええ！ ちょっと、あんた、助けるよ！ ……じゃなかった、緑麗様っ！ 助けてえっ！」

ええい、うるさいな、さつきから。

「公務員でない者に頼るな、自力で何とかしろ」

「そんなああっ！」

公務員を暖かい言葉で叱咤激励して、またしてもいつの間にか変わっている風景に溜息ついた。

今度は私の故郷の村だ。

走馬灯のように巡る、私の記憶の中の風景に、多分、意味はない。

私が黄龍の保持者である事にも、大した意味はない。

ただ、私は、黄龍を否定し、私から奪おうとする者に対しては、全力で阻止す

るだけだ。

その想いは、ずっと変わってないはずだし、これからも変える気はない。

「……よし」

「……!?!? 助けてくれるのか!」

立ち上がった私を見て、涙を流さんばかりの公務員が誤解した。

「いや、自分の行くべき道を再確認しただけだ。お前はお前の道をゆけ、公務員」

「ええ〜っ!」

「まあ、ギブ・アンド・テイクで助けてやらんこともないが……、どうする?」

「こっ、この際、何でもする! いや、します! お願いします!」

カートリッジを装填し直し、オートマチックのハンドガンを撃ちまくる公務員は、もう半分自棄になっているようだった。

しかし、その狙いはかなり正確だ。

「公務員、さっき私が言った宿題の答えは出たか?」

「な、何の話だ?」

「黄龍は電気ウナギの夢を見るかどうか、だ」

「……？ 見るんじゃないか？ 脊椎動物なら確か、大脳皮質がどうたらって話で……」

「半分正解だ」

だいぶ疲れてきたのか足元がふらついた公務員に、横合いから襲い掛かろうとしていた亡者を一体、聖魔剣で薙ぎ払った。

「……！？ ……半分？」

「黄龍はな、エネルギーを摂取し、恒常性を有し、自己増殖をする事を生物の定義とするなら、『生物』じゃない。しかし、どこかの科学者が作ったAIを埋め込まれたロボットでもない。まあ、お前には興味のない話だろうが……」

「……？」

ハアハアと息を乱す公務員が、急に動きを止めた。

私が大技を発動をさせようとしているのが分かったらしい。

「公務員、『何でもする』と言ったな？ その言葉、忘れるなよ……？ 下がつてろ、まとめて片付ける！」

私が今まで抑えていた『土行』を一気に解放すると、亡者達が全員、動きを止めて立ちすくんだ。

こいつらが何で『土行』を嫌うのか、分かった。土は、自分達の存在を無に帰すもの——だからだ。

こんな姿になっても、その畏敬の念は消えない——って事か。  
いや、こいつらだけじゃない。全ての有機物は大地に還る。

「転生を望まず、完全なる死も拒否するその姿勢は見上げたもんだが、お前達に、もはや誇りはあるまい」

転生は確かに苦しい。

前世の因縁を引きずって生きなければならぬのなら、確かに、こんな馬鹿げた事はないだろう。

だから、その輪廻の苦しみから逃れようとしている仙道達は、天界のシステムにどこまでも反逆しているわけだ。

天界の神々と、仙界の仙道達が、根本的な部分で相容れないのは、つまりそういう事なんだろう。

「亡者よ、大地に還れ！——黄龍！」

聖魔劍に黄龍の力を一部取り込んで、深々と大地に突き刺した。

「グオオオオオ！」

見えているだけでも十体は下らない亡者達が、苦悶の呻き声と共に、大地に吸い込まれるようにして塵となっていく。

やがて、静まり返った大地の上で、カチリという乾いた音がした。

公務員が私に向けた銃口は、一センチたりとも動かない。何となくこういう展開になるんじゃないかという予感はしていた。

こういう事をするヤツには、ちよつとした特徴がある。後ろめたさを隠すためののか、不必要な場所で変な笑いを見せる時があるのだ。以前、上海でこんな男を何人か見た。

「俺も魂魄体でね。亡者にはならず済んだが、『餌』を必要とするのは奴らと変わりはない」

「それで？ 私を『餌』にしようって魂胆か」

「いや……、『餌』にするには惜しいな。仮にも前世は『絶世の美女』と謳われた魂魄だ」

「……」

私は座り込んでいる公務員を見下ろしたまま、どうしたものかと考えている。

一発目が急所に当たらない限りチャンスはあるはずだが、公務員の腕を考えれば圧倒的に私が不利だ。ここは、時間稼ぎをするしかない。

「一度死んだという事は、今のお前のその体は作り物か？」

「これは、肉体を持っていない泰山府の職員に支給されるボディで、元の体をクローン技術で再生したものだ。まあ、同じ体だから、生きてた頃と違和感はほとんどないけどな」

「死んでも尚、働かされてるわけか。義理もないのにご苦労なこっちゃ」

「俺がそう望んだんだ」

「何故……？」

「俺は結構ロクでもない人生送ってきた男でね。あんな人生繰り返さなきゃいけ

ないなら、転生なんかしたくないって考えるのが普通だろ？」

「来世は楽しいかもしれないじゃないか」

「それは人それぞれだろ」

「で、大人しく廃棄工場に行く気もなかったわけか。なのに、何故亡者にならずに済んだ？」

「俺は幸いにも、まだ綺麗な魂魄体で漂ってる時に今の上司が拾ってくれたんだ」

「ふーん……」

「しかし、驚いたね。黄龍と共に人界に降りた、薄幸にして最強の美女『将神緑麗』が、あんたの前世ってだけでも驚きだが、『蒼血の沙龍』がこんな年端も行かないガキだったなんて俺は知らなかった」

「……何だった？」

こいつ——、なんでその通り名を知ってる。

じんわりと手に汗を感じながら、聖魔剣の柄を握り締めた。

「俺達の間じゃ、八十のババアだとか、百二十を超えた妖怪じゃないか、とまで

言われていたが、そりや表に出てこないわけだ。こんな十五、六に満たない子供がトップに座ってるってのが分かったら、大騒ぎだろう」

「お前、『蒼龍会』のメンバーだったのか」

「あんたは俺の事なんか知らないだろう。いくらでも替えの利く下っ端が死んだところで、幹部連中にとってはどうでもいい話だからな。例え、それが黄龍のせいだとしても！」

「つまり、黄龍に……いや、私に殺された恨みか」

上海でも、黄龍を召喚した事は何度かある。その都度、死人が出ていたのは確かだ。

目の前のこの男もその犠牲者の一人、というわけか。

「いや……、殺された恨みとはちよつと違うな」

「では、何だ」

「俺は、死に際に神獣の氣をモロに浴びてしまったせいか、ちよつと特殊な魂魄体らしい。長年こんな仕事をやっていて、氣が変わって転生しようと思った事もあるが、規格外とかで弾かれた。そして、一度は廃棄も望んだが、やはり出来な

かった。上司が言うには、神獣ってのは生存本能が強いらしい。俺もその影響を受けてるんだろう」

「……」

「分かるか？ 永遠にこの魂魄体で生きていかなきゃいけないんだぜ？ あんたのせいで！」

「……フン」

話を聞いて、結局、恨み辛みじゃないか、と思った。

「つまり、己の不幸を嘆いて鬱憤晴らしがしたいだけの小者か」  
せせら笑ったら、公務員が信じられない、という顔をした。

「……!?! あんたに何が分かる！ 選ばれた魂魄と、最強の力を持つあんたに、こんな底辺で仕事をしている俺の、何が分かる!?!」

「成程、確かにこんな根性じゃ、すぐ黄龍に喰われたのも道理だな。仮にも法の外で生きてきた奴が、泣き言言ってんじゃねえよ」

「……っ！」

公務員が激昂して動こうとした直前、聖魔剣の向きを変え、『氣』を高めて刃

先だけを伸ばし、公務員の持つ銃を腕ごと切り落とした。

聖魔剣にもう用はない。ここで捨てる。

そして、公務員の懐に飛び込んで拳を叩き込むと、ヒョロ長い体が折れ曲がるように崩れたので、もう一撃、今度は肘で公務員の背中を打ちつけた。

「私を殺したいのなら、さっさと引き金を引くべきだったな」

うつ伏せに倒れて咳き込んでいる公務員は、もうまともには動けないはず。とりあえず、これで形勢逆転だ。

「あんたに挑んで、腕一本で済んだのなら、幸運だったかもな……」

地面に伏したまま、苦しそうに呟いているのに、声は笑ってる。

「イカれたか？ 何がおかしい」

「その剣……」

かろうじてやっと動かせる左手で、公務員は私がさっき放り投げた聖魔剣を指した。

「これがどうかしたか？」

柄だけになったその聖魔剣を拾い上げる。

これは、持ち主の精神力や属性の力を具現化する剣なので、単体で転がってる時は単なる筒状のオモチャだ。

「その剣なら、俺も『完全な死』を迎える事ができるかもしれぬ」

この男の本当の望みはそれか、と思った。

「死にたいのか……？」

「さあ……、よく分からない。ただ、何の目的もなく、亡者を狩るだけの毎日に意味はないし、人界に降りれず、永遠に眠る事もできない俺に価値がない事は確かだ」

「公務員、お前死んで何年になる？」

「十年も経ってないはずだが……、言っただろ。ここは時間の流れが存在しない。一日でも百年のように感じるし、一年でも一秒くらいにしか感じない時もある。無茶苦茶なもんさ……」

私は、公務員の着ているドドメ色のコートからベルトを引き抜き、彼の右肩をそれで縛って止血した。

「何のつもりだ……？」

「公務員、さっき『何でもする』って言ったよな？　しばらく私のために働いてくれないか？」

「ハア……!？」

公務員は驚いて起き上がろうとしたが、腹を押さえてまた咳き込んだ。

「あんたに関わったばかりに人界でひどい目にあっただけなのに、さらに死んでもなお、あんたに尽くせったのか？」

「ハタ迷惑ジジイのために働くよりは、よっぽど有意義だろうが」

「……本気か？」

「勿論、本気だ。しばらくやってみて、やっぱり虚しいだけです、もう永遠に眠りたいですって言うんなら、その時は遠慮なく聖魔剣で殺してやる」

「……」

公務員はやっと上半身だけ何とか起こした。

まだ苦痛の表情をしていたが、口調は完全に変わっていた。

「俺、大事な腕、落とされたんですけど……」

「クローン体なんだろ？　作り直してもらえ」

「簡単に言いますね。初期支給ボディ以外は、自腹ですよ。クローン一体に幾ら掛かると思ってます？」

「それくらい、私が出してやる」

「……どんな仕事なんです？」

「私は敵が多いからな。命がけの汚れ仕事が多いだろう」

「そんなの、蒼龍会の時と変わらないじゃないですか」

「いや、二つだけ違う」

「……？」

「蒼龍会の時の私は、自分が死なないためにあそこに居たんだ。今の私は、生きるためにここに居る」

「どこが違う……」

「大違いじゃないか。納豆を無理矢理食わされるか、茶碗蒸しを腹いっぱい食うか、くらいに違う」

「いや、その喩えはちっとも分からないんですが……。で、もう一つの違いってのは？」

「お前の顔と名前は覚えた」

呆れているのか、胡乱な目で私を見る公務員が、最後には溜息ついた。

「この俺が二君に見えず、つてのも変だが、それにしても、随分、横暴な主君だぜ……」

「じゃあ、よろしく頼む。まず最初に、火雲宮中枢に姿を見せない厄介な敵が居る。そいつを潰したい」

「了解、ボス」

14 冥府よいところ、一度はおいで

厄介な敵——とは言っても、私は素性も何も知らない。

ただ、この前の蟠桃会で襲ってきた甲冑の刺客は、明らかに私を殺そうとしていた。

表向きは紳士に「人界に帰ってもらえませんか」とお願いしてきた呉謙や、一応はこちらの反撃の余地を残してくれた元宰相と違って、あれは有無を言わずのいきなりの実力行使だ。

そんな無礼者を放置しておくわけにはいかない。

「見当はついてるのか？」

見た目年齢、かろうじて三十路手前といった感じの公務員が、その厄介な敵のことについて聞いてきた。

「ウーン、少なくとも私はまだ会った事のない人だと思う」

「成程……。広い天界の、いや、もしかしたら仙界も含むかもしれない中で、あ

んたがまだ会った事のないヤツ全てが容疑者ってわけか。そりや、探し甲斐があるってもんだ」

「嫌味ならもつとストレートに言えよ。それと、『あんた』って言うのやめてくれないか」

「でも、『緑麗様』って呼ぶと怒るんだろ？」

「だから、沙龍でいいって言ってるだろうが」

「いや、それはなんか……、ちよつとトラウマになってるんで……」

『蒼血の沙龍』という私のかつての通り名が、公務員の死に際に刷り込まれた恐怖になっているようで、どうしても『沙龍』とは呼びたくないらしい。

「そうは言ってもなあ……、あ、『甲斐馨』かおるでもいいぞ。私の日本名だ」

「九龍？」  
カオルン

「まあ、それでもいいよ……。というか、もう、何でもいいよ……」

こんなもさくれた公務員にどう呼ばれようと、どうせトキメキ度0、いやマイナスなのだ。

トキメキ度百億万パーセク（注1）くらいで『沙龍』と呼んでくれる元帥の声

がそろそろ恋しい。

「しかし、時間の流れがないとは言え、私の体内時計だとそろそろ二十四時間は経ってるような感じがするんだが、一体いつになったらその支部とやらに着くんのだ」

「あー、実は」

「貴様……、もしや迷ってるとか言うんじゃないだろうな……」

「まだ何も言っていないだろ。いや、実は、ちよつといつもと風景が違うかなーと、薄々思っているんだが……」

「迷ってんじやねえか！」

ゲシツと後頭部に蹴りを入れたら、その反動で公務員の懐からハンドガンが落ちた。

普通の銃にしては重い音がする。

「泰山府の職員ってのは皆、そんなデザート・イーグル（注2）もどきを持ってんのか」

「あ……？ いや、これは特注だ。泰山府の開発部に、銃の改造が趣味っていう

変わった技術屋が居てな。そいつに押し付けられたものだ」

左手でそれを拾い上げる公務員は、やはり不自然な感じがしない。

「お前、両利きか。いや、元は左利きだな？」

そう聞いたなら、公務員がけだるそうに笑った。

「あんたは、シャーロック・ホームズか。その若さで俺の利き腕見抜くわ、銃の違いまで分かるわ、じゃ、普通の人生送ってこれないわけだ」

「それは逆だ。普通の人生送ってこなかったから、分かるだけだ」

「成程……」

と、公務員が宙を凝視するような素振りを見せた。

「……？」

「俺が道を間違えたわけじゃなくて、どうやら道の方が動いてるようだな」

「……？ 何故分かる？」

「冥府ってのは、海の上を漂う浮き島みたいなもんでね。浮いたり沈んだり、形を変えたりしながら常に動いている。だから正確な地図は描けない」

「じゃあ、泰山府の職員達はどうかやって現場と事務所を行き来するんだ？」

「一応、冥府の空間を立方体に切り取って番号振って管理してるんだが、その立方体がある日は一キロ四方になったり、一センチになったりする。あんまりアテにはならないんだが、それを模した『空間図』ってものはある。それがこれだ」  
公務員が投げてよこしたそのルービック・キューブみたいなものは、半透明になっ  
ていて、赤や黄色に色分けされた小さな立方体が詰まっていた。

その中の、乳白色の小さな立方体の中に、ボヤッと光っている小さな点が見えた。

「この光っている場所が現在地？」

「いや、それは『本部』の場所だ。今居る場所は、黒い点で表示されてるはずだ」

「ああ、これか……」

深紅の立方体に太陽の黒点のような染みがついている場所がそうだろう。

「ちよっと待てよ……。このたった五センチ四方くらいの塊は、冥府全体を再現してるわけだよな……？」

「ああ」



「だとしたら、例え五センチといえど、冥府の端から端までつつー事で、その距離たるや、相当なものになるよな……？」

「まあ、単純計算なら、徒歩だと、体感時間で一年以上かかるな」

「一年……？」

「場合によっては十年くらいかも？」

「十年……？」

「……」

「……」

「……」

「オーマイガッ」

誰か、あの腐れジジイをどうにかして下さい。

「お、おい……？」

なんか、もう、理性が吹っ飛んだ。

いくら現実の時間が進んでいないとはいえ、こんなやる気のないくたびれたオッサンと二人きりで、こんな地の底を十年も彷徨わなければならぬなんて、

私が可哀想過ぎるだろう。

いや、今ならこの切なさを殺意に変え、一発、黄龍召喚で冥府を無茶苦茶にしてやれる！

私の怒りオーラにビビっているらしい公務員を完全に無視して、最大稼働の『土行』を聖魔剣に取り込んだ。

その波動で、何匹かクリチャー達が絶命したようだが、構うもんか。どうせ奴らも、放っておけば襲ってくる敵だ。

「フ……フフ……、『蒼血の沙龍』を舐めんなよ……」

「おっ、おい……！ 九龍！ まさかとは思うが、お前、何をする気——」

竜巻が逆流するような勢いで、私と、私が垂直に掲げる聖魔剣に収束する『土行』が、周囲に砂塵をばら撒き、音を立てる。

「我、唯一にして無二の……」

そこまで言った時、この暴風と轟音の中に、はっきりとトキメキ度百億万ドルの声があった。

「沙龍」

「……!?!」

急に、ピアノ線が切れたかのように、バラバラと色んなものが垂直落下していく。

『土行』の奔流が止まったせいだ。

「沙龍」

もう一度、今度はその声が背中から聞こえたのが分かったので、背負っていた薄いカバンを急いで開けてみた。

これは、図書館に行く時はいつも持っていく勉強道具一式が入っているカバンだが、そう言えば、今朝は小龍がつれてけーとうるさいので、この中に押し込めておいたままだった。

案の定、カバンを開けると、ちよつとへばってる様子の小龍が、顔を出した。

「元帥！」

「やつと気付いたな。沙龍、無事か」

小龍の口から、ずっと聞きたかった声が聞こえて、私はちよつと気が抜けてしまった。

「うん。まるつきり無事だし、無茶苦茶元気なので、ご心配なく」

「……そうか」

その短い言葉の中には、色んな他の言葉も詰まっている気がして、思わず微笑んだ。

「でも、ちよつと困った事になってる。何故か来た事のない場所に來てるんで、帰るのに時間がかかりそうなんだ。あ、時間は多分、そっちでは進まないと思うけど」

「冥府、最下層だろう？」

「え……、うん。そうだけど……、どうして分かったの？」

「お前が何処に居ようと、俺には分かる」

「……」

え、えーと……、どう答えればいいんだ、これは。

とりあえず、へんな顔して私に近づく公務員を手で追い払った。

「えっとね、あんまり長くは話せないでしょ？ 手短に私の希望を言うから、

出来る事はやってくれると嬉しい。出来ない事は私が自分でやるから」

「ああ、言ってみろ」

「まず、泰山府君先生をボコっておいて」

「それは、真武君がもうやった」

「そすか……」

キサさん、グツジョブ。

「もう一つ、ここから最短で家に帰れるルートを教えて欲しい」

そう言うと、何故か元帥が笑った。

「今すぐ迎えに来いと言わないところがお前らしいな」

そりや今すぐこの人に来てもらって、何も考えずにその腕の中で眠りたいところだけど、それができるんなら、こんな遠距離通話はかけてこないはずだ。

「今、お前が居る最下層から地表に出るには二つのルートがある。一つは正規ルートで、支局や支部の直通エレベーターを使うという方法だ。しかし、創造主抜きでは、簡単には辿りつけないだろう」

む、泰山府君先生と一緒に何とかなったのか。

ヒラじや駄目か、やっぱ。

と、公務員をチラッと見ると、またしても呑気に一服していた。

「もう一つは？」

「黒の森に抜ける道だ。小龍が居るなら、こっちの方が早いだろう」

「え……？　小龍がその抜け道を知ってるの？」

「多分な」

「……？」

どういう事？

この役立たずのグータラ・ペットが、なぜ黄龍しか知らない抜け道を知ってるんだ？

同じ『龍』だからか、と思っただけど、小龍は純粋な龍族とは違うし、この子は性別もない、ちよつと不思議な生き物だ。

あれ？　じゃあ、黄龍は性別があるのか……？

「小龍は方向感覚に優れているんだ。そもそも緑麗が小龍を常に同行させていたのは、自分の方向音痴を補正するためだった」

「ほー……」

西域出身者は聖霄といい、方向音痴が多いんだろうか。

まあ、あの広大な砂漠で育つと、確かに方向感覚狂うのかもしれない。

「そっか。分かった。……あと一人、役に立つのか分からないような、やる気の無い泰山府の職員が一緒なんで、何かあったら、全責任はそいつに取ってもらおうよ」

「おい……」

何か言いたげな公務員を無視して、ラブコールを続ける。

「あと、どれくらい通話可能？」

「もって数秒だろう。そろそろ小龍が限界だ」

「じゃあ黒の森で待ってて。すぐに行く」

「俺はいつも待たされる側だな」

苦笑気味に言う元帥は、きつと、この数年間……、いや、数千年間を思い出したに違いない。

「待つ身も、待たす身も辛いけど……、あれ？」

どうやら、そこで通話が切れてしまったようだ。

小龍が、頭を左右に振って、ボヤーっとした目で私を見ている。

「帰るコールは終わったのか？」

公務員が一服していた煙草を地面に落としてもみ消す。

左手で、左側のホルスターに収めているデザート・イーグルを器用に取り出していた。

「途中で切れちゃった。まあ、いいや。続きは会ってからで。……ところで公務員、左手用の銃は持ってないのか？」

「丁度メンテ中でね。ジョニーに預けたままだ」

「ジョニー？ ガイジンか」

「さっき言った、銃の改造屋だ。純粋なジャパニーズだが、そう名乗ってるだけ

や」

そう言いながら、襲い掛かってくるクリーチャーを仕留める公務員。

こうしてモンスター退治をしながら進むしかないわけか。

(注1) パーセク……天文やSFではお馴染みの距離の単位。

(注2) デザート・イーグル……オートマチックのハンドガンの中では最強の威力を持つと言われている。

毎年、龍王會議では、北海龍王敖吉から同じ議題が提出される。

それは、表向きは『龍族の今後について』という、退屈でまっとうな議題なのだが、内容はとんでもなく危険なものだった。

しかし、龍族の間ではわりと話題になる話でもある。

太古の昔、皇家から発したはずの龍族が、何故、現在は、その皇家より官位を授かる“立場”になっているのか——というのが北海龍王の最大の疑問になっている、実は、そこに同調する龍族も多いのである。

龍王となった当初から敖吉は、天帝の正妃として龍族の姫を差し出す事を提案したり、大胆にも、龍王の一人が玉座に座ってもいいのでは、と言った事まである。

それについての四海龍王達の意見は、いつも否定的だった。

敖閏も、奏欽も、東海龍王敖坤も、今の治世に不満はないし、わざわざ事を荒

立てるような真似はしなくなかったからである。

だから、結局は多数決で否決となって、この物騒な龍王会議の内容が外に漏れる事もなかったのだが、今年は少し違った。

会議を束ねる東海龍王敖坤が、敖吉寄りの主張を始めたのだ。

当然、敖閏と奏欽はそれを不審に思ったが、二人ともそれを頭わにして反発する程直情ではない。

しかし、

「面倒な事は遠慮したいんだけどね」

敖閏は、それを自分のスタンスにしているので、反論とまではいかないニュアンスで言った。

「そもそも、なんで敖吉が神獣の件に首突っ込まなくちゃいけないわけ？」

「そういう言い方はやめて頂きたい。敖閏殿。あなたはただ、ご自分の仕事を増やしたくないだけでしょ」

敖閏は今の龍王の中では一番年配になるので、敖吉も一応形だけは年功序列を重んじて、口調だけは丁寧だった。

といっても、敖閏と敖吉はそれ程歳は変わらない。

「敖吉殿が言っている事は、分からない話ではありません。確かにあの力は、脅威と言えば脅威です。今のところ、陛下が黙認されておられるようなので、問題が表面化していないだけで、サロンでも同じように考える者は実は多い」

普段は、四海龍王の代表を担っておきながら、あまり自己主張をしない敖坤が、そんな事を言っている。

敖坤が若手の龍族達を集めて、毎週サロンで『勉強会』をしている事は周知の事実だが、そこで色んな要人を招いて政治論などを聞いてるうちに、感化されてしまったのではないかと敖閏は思っている。

しかし、奏欽はこの敖坤の変心には、他に思い当たるところがあった。

奏欽は、敖坤とは世代が近いし、従兄妹のような関係なので、彼の個人的な事も多少は知っている。

敖坤が、明確に敖吉寄りになったのは、天帝が代替わりしてからだから、原因は恐らくあの元将神にあるのだろう、と奏欽は思っていた。

敖坤は東海龍王であると共に、東方軍大将も兼任している。

だから、これは軍部内の、将官の間では有名な噂らしいが、敖坤が緑麗に求婚して断られたという話がある。

親の七光りで龍王になったと言われ、もともとが内向気味な敖坤にとってみれば、もしかしたらその一事がずっと忘れられないのかもしれない。

「それをやる権限が果たして僕達にあるの？ いや、あつたとしてもそれは簡単にしていい事ではないよ」

敖閏の少し厳しい口調に、奏欽は、ハッと顔を上げた。

会議はますます、過熱していく。

「四海龍王は、四方将神とは違う。我々には、天の力を『調整』する義務や権利はないはずだよ」

「しかし、黄龍もまた龍ですぞ、敖閏殿。龍王は、全ての龍族の安泰を守らなくてはならない。そのためには——」

黄龍を龍族の手によって『保護』せよ、と北海龍王は言っているらしい。

(敖吉様だって、昔はここまで強引ではなかったのに……)

奏欽は、先ほどからこの会議を静観していた。

何かが、動き出そうとしている。それは確かだった。

結局、議論に決着はつかず、龍王会議は異例の後日持ち越しという事になって、本日は閉会した。

敖閏は、会議が終わるとすぐに退出し、どこかへと消えた。

奏欽もすぐに自宅に戻ろうと思っていたが、敖坤に呼び止められ、しばらく世間話に付き合う事になった。

小さい頃は、よく水晶宮に遊びに行つて敖坤とも遊んだが、既に敖坤は若くして東海龍王であり、東方軍大将でもあったので、仕事に行つてしまふ事はしよつちゆうだった。

先代の東海龍王敖光が早死にしたせいで、敖坤も色々と大変な思いをしたのだらう。

「今度、時間があつたら二胡をまた聞かせて」

敖坤はそう言ったが、奏欽はあやふやな笑みを見せる事しかできなかつた。

「欽姫、どうして、弾かなくなってしまったんです……？」

「飽きただけです」

「そう……」

そんな上辺だけの会話をするために自分を引き止めたのか、と奏欽は少し苛立った。

「もし他に理由があるとしても、あなたの変心と同じくらい、人に言えるような事ではないんです、きつと」

「変心、か。そう見えてしまうんだろうね」

奏欽は、そんな悲しげな敖坤の言葉に、決定的なものを感じてしまった。

「敖坤……？　もし、引き返せるのなら、私が引きずってでも、連れ戻しますよ？」

もしかしたら、この他力本願な従兄弟は、本心の部分ではそれを望んでいて、自分に何とかして欲しいのではないか、と奏欽には思えた。

しかし、敖坤にしてみれば、男としてのプライドや自身の地位が邪魔をして、素直にそれを言う事はできないのかもしれない。

「もう、遅いよ」

「何事にも遅すぎるって事はない——って言った人が居ます」

「残念ながら、僕にはそう言ってくれる人は居なかったね」

「……」

「敖閏殿の言う通り、これにはかなりのリスクを伴う。ともすれば、叛逆罪になりかねない。だけど、僕はもう自分の意思を曲げるつもりはないんだ」

「一体、何のために……」

「全ての龍族の安泰のため、なんて奇麗事は言わない。ただ、僕がやりたい事をやるだけだ。それには、欽姫の力が必要なんだよ」

「……」

「多分、明日の会議で、敖閏殿と君は反対するだろう。でも、過半数決着がつかなければ、議長である僕に二票分が与えられる。結果は、もう見えてるけどね」

その時、管弦府のスタッフが、奏欽を迎えに来た。なかなか戻らないので、心配して来てくれたのだろう。

敖坤も、そのスタッフの姿を認めると、挨拶だけして去っていった。

(つまり、反対しても無駄だから協力しろって事ね……)

奏欽は溜息ついて、迎えに来た瑠伊に、今外した冠を渡した。長時間この冠をつけているとまるで拷問のように重く感じる。何故、自分はこんなものをつける事を承諾してしまったのか――。

「瑠伊、今日はこっちに泊まる事にしたわ。明日も会議なの」

「珍しいですね。一日で終わらなかつたんですか」

「珍しいついでに、連絡を取りたい人が居るんですけど」

「誰です？ まさか……」

と、瑠伊が敏く反応したので、奏欽は嗜めた。

「違うわよ」

瑠伊が思い当たったであろう人物は、今、帝都には居ないはずだ。

だからこそ、今なら、あの敷地に赴いても鉢合わせるような事はないので安心だと思ったのである。

黒焰虎に乗った九雷は、黒の森へ向かっていた。

「冥府内に時間は存在しない」という沙龍の言葉を信じるなら——事実そのようなのだが——、すぐにでも沙龍と会えるはずである。

眼前に森が近付くと、温度が一気に下がった気がした。

携帯電話が鳴ったので、それを取り出し画面を確認すると、『馬霊』とある。

九雷の部下の一人で、いつもは司令部に詰めている特務のスタッツだ。

「どうした、緊急か？」

司令部の電話ではなく、馬霊個人の通信機器からのコールだったのでそう聞いたのだが、電話の向こうは落ち着いていた。

「元帥閣下に、非公式面会の申し出があったのですが、何分、お相手の身分が身分ですので、直接ご指示を仰ぎたいと思ひまして」

「……誰だ？」

普通、民間人の面会の申し出なら、受付の段階でやんわりと断る事になっているが、これがVIPになると非公式とはいえ、個別に対処しなければならぬ事がある。

「南海龍王殿です」

馬霊の答えは、九雷にとってはかなり予想外だった。

「奏欽殿か……？」

九雷は、奏欽の事は勿論知っているが、宮中で会っても短い挨拶をするくらいで、まともに話した事は一度もない。

さらに、最近は奏欽が滅多に登城して来ないので、その存在を忘れかけていたくらいだった。

「用件は聞いたか？」

「いえ、直接会ってお話したい事があるそうです」

「……そうか」

ここで、思い当たる事が二つ三つすぐに出てくるのが九雷なのだが、そのうちの一つは、可能性としてありえないと思ったのですぐに消した。

だとすれば、敖丁の事かもしれない、と思った。

奏欽の兄、敖丁は南方軍大将を務めているが、ずっと帝都を留守にしている。その敖丁に帝都外での任務を命じたのは他ならぬ九雷なので、奏欽が総司令部に兄の行方を問い合わせに来たのなら、分かる話だ。

「間に合えば、今夜中に一度司令部に戻る。その時でいいなら、会ってみよう。奏欽殿に待つ気がないなら……」

「待つと仰ってます」

「分かった。なら、丁重にもてなしてくれ。だが、あまり夢は見るとなよ、馬霊」  
九雷が言いたい事は、言葉は省略されていても、長年の部下には理解できる。つまり、誰もが目を見張る程の美女に、過ぎた妄想を抱くな、と言っているのである。

ただでさえ、奏欽はステレオタイプの『高嶺の花』であるし、本人もそれを自覚しているのです、仕事以外で、いや、たとえ仕事でも、異性と親しげに口をきくことはない。

携帯電話を切って、九雷は最初に消したはずの可能性を、もう一度考えてみ

た。

『離婚した元夫に会いたがっている可能性』である。

九雷は、奏欽が離婚した経緯を知っているし、彼女の人伝えに聞いた性格を考慮すれば、やはりその可能性は皆無と言わざるを得ないのだが、引っ掛かる事もなくはない。

わざわざ、その元夫が帝都に居ない時を狙って来たのだとしたら、逆に作為的なものを感じる。

(何より、あの月琴の音だな……)

九雷は数年前に聞いた、奏欽の演奏を思い出していた。

楽器を弾く事を封印して久しい奏欽が、ごく私的な会合の席で、玉帝のたつての願いで、少しだけ月琴を披露した事があった。

その場に居た者全てを魅了する音色であった事は確かだが、曲目のせいもあってか、九雷はそこに奏欽の想いを聞いた気がしたのだ。

勿論、音楽を嗜む者でなければ分からない程度の“情”だったが、奏欽はまだ別れた夫に心を残しているのかもしれない、と思ったのである。

しかし、元夫の方はといえば、相変わらず本音を漏らさないし、毎日フラフラ遊び歩いている始末だ。

(まあ、こればかりは俺がどうにかできる問題でもないんだがな……)

と、九雷は気持ちを切り替えて、黒の森に降り立った。

「何か感じるか？ 黒焰」

「いえ……、以前と同じです。感じるのは陰気だけですわね」

「そうだな。冥府の瘴気もかすかに感じる」

「御意」

「黒焰、しばらく沙龍と行動していて、どう思った？」

「どう、とは……？」

九雷のその問いの意味が分からず、黒焰虎は聞き返した。

「大した意味はない。思うままに言ってみろ」

「はあ……、私は霊獣なので、今の緑麗様と昔の緑麗様が同じ存在だとは正直思えません。イメージもだいぶ違います」

「では、お前はどちらが好きだ？」

「は、はあ？ 私にとってはどちらがよりお守りしやすいか、という見方くらいしかできませんが……、その……、私は昔の緑麗様の歌を聞くのがあまり得意ではありませんでしたので……」

と、黒焰虎がかなり婉曲に言ったので、九雷は笑った。

緑麗の歌は、ただでさえ破壊力満点だったが、アルコールの摂取量に比例してその破壊力も増すので、熱心な求婚者達も、それを知るといつの間にか去っていくというパターンが多かった。

「九雷様にとっては、同じなんですか？」

「それは……」

九雷が答えようとした時、背後の地面でゴソゴソとマンホールのふたのようなものが持ち上がった。

「プハ！」

そこから顔を出したのは、かろうじて人だと分かるような汚れた物体である。しかし、九雷にはそれが沙龍だと分かる。

同じく汚れて黒蛇のようになっていた小龍が、沙龍の頭上に乗っていた。

「私も聞きたい。貴方が愛しているのは、誰？ 緑麗？ それとも甲斐馨？」  
文字通り、地の底から這い出してきたような沙龍は、聖魔剣を肩に担いでいる。

その姿や状況に反してにこにこしているのは、三日ぶりの地表と、九雷に会えた事が嬉しいのだ。

しかし、九雷の方は神妙な顔をしていた。

「俺も聞きたい事がある。お前がそれに答えてくれるのなら、俺も答えよう」

「うん、何？」

「沙龍、お前は前世の記憶を失っているのに、何故俺を選んだ……？」

「……うわ」

沙龍は純粹に驚いていた。

もし人界に戻ると言うなら再び監禁するだけだ——、とまで言った本人がそんな事を気にしているなんて。

「お前は全てを忘れているのに、何故ここに戻ってきた？」

「私は『戻ってきた』つもりなんてないよ」

「……？」

九雷が、本当に分からないという顔をしているので、沙龍は笑った。

「元帥が考えてる程難しいことじゃない」

「……」

「……」

この場に居てもいいのだろうかと思いつながらにも動けない黒焰虎と、遅れて地表に顔を出したまま頬杖ついてこの顛末を眺めている公務員は、同じ感想を持ったに違いない。

ヒロインのいでたちが怖すぎる——、と。

とても、こんな色恋沙汰の会話に適した格好じゃないのだ。

泥だらけの沙龍は野戦場を三日間潜り抜けてきた、という感じだし、聖魔剣にはさつき刻んだクリーチャーの血やら肉片やらがまだ滴っている。

元は水色だったはずの着物も、返り血のせいで全身赤黒い染みがついているし、無造作に結んである髪の毛も、かなりボサボサだ。

「私は前世の因縁とか運命によって、貴方を好きになったわけじゃない。私が、

人の生を二十年生きてきた甲斐馨が、初めて逢った九雷という男を愛してしまっただけ」

「……」

「だから、他の人にどう呼ばれようと、これっぽっちも、毛の先程も気にならないけど、貴方にだけは絶対、『緑麗』と呼ばれたくない」

沙龍がキツパリそう言い渡すと、九雷は会心の笑みを漏らした。

「俺が、あの日から、一度でもお前をそう呼んだ事があつたか？」

「ないね」

と、沙龍もにつこりと笑った。

九雷が言った「あの日」というのがいつなのか、沙龍には分かる。

勿論、黒焰虎と公務員には分からなかったし、どうでもいい話なのだが。

「言うの遅れたけど、ただいま」

「沙龍、俺の答えは聞かなくていいのか？」

「今、聞いたから、もう……いい、というか、もう……、私、へトへトで……」

そう言つて、前のめりに倒れそうになつた沙龍を、九雷が今度こそしっかりと

抱きとめた。

「起きたら、話すよ、黄龍の秘密を——」

沙龍はそう言いながら、もう眠りに落ちていた。

冥府探検から戻って二十四時間、泥のように眠っていたせいで、その間に何が起こったのか分からないけど、ひとまず帝都は何事もなかったかのうちに平和だった。

水雲宮の大浴場で、黒トカゲのようになってしまった小龍を洗ってやると、小一時間でやっといつもの緑色に戻った。

何故か私の方は目が覚めた時、服も体も綺麗になっていたので、ゴシゴシ洗う必要もなかったが、ついだったので、小龍と一緒にお風呂に入っていると、脱衣場の方からは、私の着替えの用意をしているらしい悠花の鼻歌が聞こえる。

「そういや、お前はなんで『龍脈』を知ってたんだ？」

浴槽の中を、泳ぎながらはしゃいでる小龍に聞いてみた。（注1）

小龍が迷わずに道案内をしてくれたおかげで、私は無事、黒の森に到達できたわけだが、小龍が何故その道を知っていたのか、という疑問は未だ解けていな

い。

「クウ……?」

「まあ、お前に聞いてもしょうがないか……」

元帥は（恐らく泰山府君も）、冥府から黒の森に抜ける道があるという事を最初から推測していたのだ。

それが、かつて黄龍が通った道である事も、それ故に、同じ龍である小龍なら分かるのだろうかという事も。

そして、扶桑の木の先にあるというブラックホールが、どこか次元の違う世界への扉だと考えていた泰山府君は正しい。

私は四千年前に黄龍が作った龍脈を同じように辿って、実際に見たのだ。

それは、時間の流れが存在しない冥府で、黄龍自身が、私に見せた映像である。

『遙かなる雲漢』

私にはそうとしか表現できない。

群青色の空間に、白く密集した点がある場所。

黄龍の故郷は恐らくそこにある。

いつなのか、どこなのかは分からないが、惑星規模の宇宙戦争において、主星から掘削された『エネルギー』。

それが神獣の正体だ。

星の力、ひいては、全てを無に帰す大地の力。

だから、黄龍の真の力は、破壊ではなく『リセット』なのだ。

だから、神獣には悪意も善意もなく、自我も精神もない。

風呂からあがって、部屋に戻ると、ご就寝前の元帥閣下がベッドで本を読んでいた。

私はさつき起きたばかりだから眠くはないんだけど、一週間プラス冥府探検期間も合わせて、随分ご無沙汰な気もするので、その広い背中にタコのように張り

付いた。

「ぶ！」

しかし、元帥が読んでいた本のタイトルが見えたので、思わず声に出して笑ってしまった。『やさしい日本語の書き方』だって？

「今から日本語勉強すんの？　なんで？」

天仙界エリアでは、ほとんどの住民達が、話し言葉に関する素晴らしい神通力を持っている。

誰が何語を喋ろうと、理解できるというのだ。

当初、日本語と英語しか喋れなかったキサさんがそれを不思議がっていたが、つまり、彼らはあらゆる言語の文法と単語を覚えているわけではなくて、喋っている人が何を言いたいのか読み取る心力があるという事なのだ。

だから、元帥だって、例えば私が日本語で寝言を言ったとしても理解できるんだから、改めて勉強する必要なんかないのに。

「いや、ちよつとな……」

「日本語の本でも読まなきゃいけないの？」

書き言葉に関しては、その神通力も通用しないらしいので、それならあり得ると思った。

「いや、ちよつとな……」

「論文だったら遠慮するけど、簡単な本くらいなら私が読んであげるよ？」

まあ、キサさんに言わせれば私の日本語は相当怪しいらしいけど。

「いや、ちよつとな……」

困ったように繰り返すので、もう追求しない事にした。

改めて、フカフカのシートに沈み込んで、この心地よさを堪能する。

「我が家に勝るものナーシ」

そう言ってみて、ふと、思い出した。

「黄龍はもう我が家には帰れないのか……」

「どういう事だ？」

「うん……、黄龍の故郷はなくなってしまったんだよ」

夢の続きのような話をする私に、元帥が心配そうな顔を向ける。

大丈夫だって。別におかしくなったわけじゃないから。

「つまりね、『事故』だったの。惑星エネルギーを取り出す事のできたような人達が、惑星規模の戦争なんかやっちゃったら、大抵、最後はドカーンでしょ。星系一個まるごとなくなっちゃうような事故があっただよ。だから、抽出されたエネルギーだけが残って、あちこち彷徨い、最終的に冥府の最下層のブラックホールにたどり着いたって事なんだと思う」

「なら、麒麟は？ 黄龍と麒麟が同じ時代に生まれた『エネルギー』だとしてら、何故東方天界に現れたのに数百年の誤差がある？」

「さあ？ それは分からないけど……」  
そこら辺はどうでもいいといえば、どうでもいい。

「私は扶桑の木の場所までは行かなかった。だけど、泰山府君の疑問には答えられるよ。それも黄龍が教えてくれたから」

「何故、扶桑の木がそのままの状態だったか、という事か？」

「うん。黄龍も、麒麟も、本当の力は『リセット』なんだよ。だから、全てを破壊するパワーがあっただとしても、それを全て元通りにする力も同時に持つてる」

「成程……」

私は、まるで、長年の友が大昔のアルバムを見せてくれたような感じで、やけにスッキリしていた。

今となつては、もう、こうして恋人に聞かせる夜伽話くらいにしかならないとしても。

(注1) トカゲは実際に泳げるらしい。

今日も帝都はポカポカ陽気だった。

改めて泰山府の本部に赴いて、あのハタ迷惑ジジイに文句の一つでも言ってみようと思ったのに、当の本人はとつくにバツクれた後で、盆休みの丸の内かというくらいに人の居ない本部事務所では、公務員が一人、窓際の席で昼寝をしていた。

「……こら、そこの公務員。給料分くらい働け」  
軽く椅子を蹴った。

が、薄目を開けただけで、昼寝モードを解除する気はないらしい。

「無職のお前に言われたくないんだがな……」

「無職って言うな。これでもちゃんと請負仕事はしてるし、夜は夜で結構ハードなお勤めもしてるんだ」

「……。ハードなのか」

「ウム。まあ、それはいいとして。お前、なんで本部に居るんだ。干されてんのか？」

「あのなあ……。誰かさんに切り落とされた右手を、新しく着けてもらったばっかなんだよ」

と、ヒラヒラと右腕を振って見せる。

「ああ……。そうか。よかったな」

「今は、リハビリ兼ねてしばらく事務仕事だけで勘弁してもらってんだ」などと、その事務仕事もしてないヤツが偉そうに言う。

「んじや、腕の請求書は水雲宮に回しておいてくれ」

「それなら、もう昨日のうちに渡しておいた」

「誰に？ 紗衣か？ 悠花か？」

水雲宮で取次ぎをするのは、大抵その二人だ。

庶務を取り仕切っているのが紗衣というキャリア・ウーマンで、悠花は私の着付け係をしているまだ中学生くらいの女の子だ。

「いや、水雲宮に行く途中、丁度、お前のカレシに会ったんで、その時渡して：

…、というか快く持っていてくれた。さすが、天界軍のトップは豪気だねえ」

「え？ 元帥が？ 私は何も聞いてないぞ」

うーむ、またしても過保護モード発動か。

恋人が世話になった礼は、自分がするっていう事か。

まあ、いいんだけど。

いや、よくないけど。

『そういう過保護ってどうよ』といつもの病原体が騒ぐのを何とか無視して、  
睡魔と戯れているような公務員も無視して帰ろうとしたら、

「あ、おい、九龍——」

「……なんだよ？」

呼び止められて振り向くと、公務員は、ドドメ色のコートの下から鈍い銀色の  
デザート・イーグルを出して見せる。

前に見たのとは少し違うタイプだ。

「メンテに出してたコイツも戻ってきた。少しは役に立てると思うぜ」

「泰山府の仕事は続けるつもりか？」

「このこのIDは結構色んな所で役に立つからな。その方があんたもいいだろ？」  
「まあ、そこら辺は好きにしろ。じゃあな」

泰山府の本部から、火雲宮の行政エリアに出る階段を上がると、白帝君に出くわした。

改造制服姿なので、結構人目を集めてる。

この四神府の制服は、そこらへんを見渡せばすぐに見つかる天界軍の軍服とは比べ物にならないくらい、目立つ。

色合いで目立つのは近衛府の軍服だが、近衛の軍人さん達はそこそこ数も居るので、やはり四人しか着る事のできないこの四神府の制服は、嫌でも目立つのだ。

「やっぱここだと思った。阿姐、一人で帝都をフラフラしてると、人攫いに連れていかれるぞー」

「お前までどこかの過保護なカレシみたいなさ言うなよ……」

「あらん、緑麗様ったら、もう倦怠期!? ……なんちやって、紫凜の真似〜♪」  
「なんでそんな不必要にハイ・テンションなのか分からんが、まだ帝都に残ってたの? 元帥に怒られるよ」

「あゝ、うん、すぐ帰るわ。その前に、これなんだけだよ……」  
と、白帝君が恐る恐る懐から取り出したるや、えらくレトロな文箱のようなものだった。

“のようなもの” としか言えない。何故かそれは焼け焦げていて、あまり原型を留めていないからだ。

「なに、これ？」

「竜吉公主に、阿姐に届けてくれって頼まれてたんだが……。ホラ、この前、俺、敖開と派手に喧嘩しただろ？」

「うん……?」

待て、なんか嫌な予感がするぞ。

「それで、その時のせいで、どうもそんな姿に……」

白帝君は、もう逃げる気マンマンなのか、一步後ろさった。

「待て。で、これ、中身は何なんだ？」

「さ、さあ？ 俺は聞かされてないんだけど、どうせあの公主の事だから、しよーもないラブレターかなんかじゃねえの？」

「……」

パカッと中を開けてみると、案の定、焼け焦げた紙片が入っていた。

いや、かろうじて紙片、と分かるだけで、そのほとんどが消し炭のようになっている。

「聖霄……」

「な、なになな、お姉ちゃん」

「もし、これが超重要書類とかだったら、どーする？」

その可能性は、認めたくないが、ものすごく高いだろう。

願わくば、ただのラブレターか、もしくは玉帝が書いていたとかいう『危ない女医シリーズ』とかならいいんだが、どう考えてもこれは『昊ちゃんレポート補完バージョン』の一部のような気がする。

「い、いやあ、どうするって言われてもな……。あ、〴〵ごめんなさい？」

「ホホウ。……こら、待て！ 謝って済む問題じゃないだろーが！」

逃げる白帝君を追いかけ回していたら、急に視界に人影が飛び込んできた。

「……っと、何やってんだ、お前ら」

「陽輝!？」

オレンジ色の髪が私の目の前に立ちふさがっている。

というか、私が陽輝の行く手を邪魔したのか。

「あー！」

その隙に、白帝君は白虎へと姿を変え、空に逃げてしまった。

「クソー。どうやって責任取らせようか……」

いや、その前に、この焼け焦げた紙片を復元する方法を考えた方がいいかもしれない。

この世界なら、何とかしてくれそうな人も居そうだし。

「なんか、久しぶりのはずなんだが、ここは変わんねーよなー。……ん？ なん  
だその手は」

「お土産は？ 私があげた『ギャンブル・スープ』の懸賞で世界一周旅行行って

きたんでしょ？」

「あー、結局一周どころか、半周もしないで飽きて戻ってきちまったんだが……。こんなんでいいなら、やるよ」

と、不良中年が懐から取り出したのは小さなウイスキー・ボトルだった。

「……。まあ、貰っておこう」

「そんな嫌な顔すんなよ。一応、スコッチ・ウイスキーの値打ちモンだぜ？」

「あ、そう。今夜にでも有難く頂くよ」

と、表情変えずに棒読みで言うておく。

「で、結局誰と行ってきたの？」

「あー、色々」

「いいのか、そんなんで……」

自分が今、最高にラブラブで幸せだからというわけじゃないけど。

まだ未来も希望もある若い白帝君と違って、あんまり未来も希望もなさそうなこのオッサンが、即席カノジョとかで満足してるんなら別にいいけど——、なんて思ってしまった。

「あ、遅くなっただけど、お帰り」

そう言ったら、何故か陽輝が一瞬固まった。

「……ああ、タダイマ」

「……？ どしたの？」

「いや、待ってる人が居るってのは幸せだよな」

「別に待ってたわけでもないけど」

「……そうですか」

「でもさー、待つ方も幸せだよね」

と、これはいつだったか、私が言おうとしていた言葉だった。

「そうかー？」

「そうだよ」

とりあえず、明日からは釣りができそうだ。

.....to be continued 『龍王編』

作中の沙龍の台詞、「待つ身も、待たす身も辛いけど……」は、有名な太宰治のエピソードをちよつとヒントにしてあります。

遊興をし尽くして金がなくなった太宰は友人（檀一雄）を旅館に人質として残し、師（井伏鱒二）の所に金の無心をしに行くんですが、なかなか戻ってこない太宰に痺れを切らした友人が井伏家に行くと、太宰はそこで呑気に将棋を打っていたといえます。

そこで、太宰が友人に一言。

「待つ身が辛いかね。待たせる身が辛いかね」

この発言の真意については色々な説がありますが、待たせる身も辛いんだよと言いつつ、実は、太宰はほとんど反省してなかったんじゃないか、と私は思っています。

それは、このエピソードを以ってしてあの「走れメロス」を書いた事からも窺

える気がします。つまり、あの太宰が、純粋な友情話や人間不信の王が改心するような話を、百パーセント信じて書くはずもなく、

「こんな美談が本当にあるわけないんだよ（だからフィクションで書くんだよ）」

という、彼自身の人間に対する絶望と、こういった友情に対する強烈な憧れが同時に存在していたんじゃないかと。（世の太宰ファンには怒られそうではありませんが）

あまりいいイメージのないこのエピソードを、私は今作の「冥府編」において、

「待つ身も、待たす身も辛いけど（どっちも幸せなんだよ）」

という正反対なポジティブなメッセージにしてみました。

生きている限り、待つ事も待たせる事もできるんだよ（だから幸せなんだよ）、という沙龍の想いは、私の想いでもあります。



